

第7章 まとめ

1. 妻木法大神遺跡出土の縄文前・後期土器について

妻木法大神遺跡の調査では、自然河道、包含層およびいくつかの遺構から多量の縄文土器が出土した。量的にまとまっているのは前期、後期、晩期の土器である。本節では、前期と後期の土器を縦年に位置付け、本遺跡の消長を整理する。そして、派生するいくつかの問題点について、周辺遺跡と比較しながら若干の考察を試みる。

1. 本遺跡出土土器の縦年的位置付け

(1) 前期西川津式について

本遺跡出土土器の中で最古のものは、早期末～前期前半と思われる織維混入土器であるが、小片であり型式までは特定できない。出土量が多く集落の形成開始時期を示唆するのは前期初頭西川津式である。西川津式の分類および縦年は、井上智博や柳浦俊一によって行われている(井上1991:1996、柳浦2001)。両者の分類は細部で多少の違いはあるが、A・B・C類の大別三分類は一致している。すなわち、口縁部に肥厚帯を持ち押引沈線文や連続刻突文を施すA類、横位の条痕地に微隆帯を貼付するB類、胴部の強く張る器形に押引沈線文・連続刻突文を施すC類である。本遺跡出土土器について、大まかな傾向をつかむために押引文・連続刻突文を持つものをまとめてA・C類とし、B類と比較すると、図示した個体では1:3でB類の方がが多い。全形を窺える資料が殆ど無いためA類とC類を区別するのは困難であるが、縦位の隆起線を貼付した363、388、406はC類の可能性がある。ただし、いずれも押引ない刺突文が器底状のモチーフをとり密に施されている点は、縦年の位置付けを行いうえで注意される。

以上のように、西川津式B類の比率が高いことが本遺跡の特徴であるが、本遺跡の他にも、B類もしくはA・C類の一方が卓越する遺跡が存在することが指摘されている(井上1996、柳浦2001)。矢野健一は、こうしたあり方をB類が単独で一時期を構成する根拠とし、A類とB類を併行関係ではなく時間的前後関係ととらえて、新たな縦年案を提示した(矢野2002)。井上・柳浦の縦年と矢野縦年のどちらが妥当であるのか、本遺跡の資料のみから検証することは難しいが、他地域の縦年とのクロスチェックを行ううえで、北陸地方との関係が考えられる羽状縄文系土器301の存在には注意しておきたい。また、本遺跡出土のB類に垂下隆帯をもつものが殆ど無い点は、両者いずれの縦年においても新しく位置付けられる要素と思われる。したがって本遺跡の前期土器は、西川津式の新段階を中心とすると考えておく。

(2) 後期の土器について

後期の土器では、福田K2式併行期、布勢式、崎ヶ鼻式、四元式～彦崎K2式併行期に相当する資料が出土している。山陰における福田K2式併行期の土器として、2本沈線で文様を描く点を特色とする島式が提唱されている(柳浦2000b)。本遺跡で出土したのは4点ほどであり、いずれも小片であるため2本沈線の特徴ははつきりと確認できない。続ぐ布勢式は、千葉豊によって3時期に細分される可能性が指摘されている(千葉1990)。これも出土したのは小片が多く、正確な位置付けは難しいが、黒色土包含層出土の口縁部416は上面施文型であり、古い様相を示す。また、2～3条の沈線束で幾何学文様を描いた胴部片が数点認められるが、直線的なモチーフは布勢式の新相から崎ヶ鼻式にかけてのものであろう。

後期の土器で量的に主体を占めるのは、いわゆる縁帶文土器に属する崎ヶ鼻式である。千葉豊は、崎ヶ鼻式を1式、2式に細分した(千葉1989)。1式が津雲A式併行、2式が彦崎K1式併行とされたことと関係して、崎ヶ鼻1式は外面施文、2式は内面施文の土器と理解されているようであるが、柳浦俊一は、山陰では内面施文は少なく型式的に分離できないとした(柳浦2000a)。本遺跡出土資料中にも、千葉の崎ヶ鼻2式と考えられる胴体は認められず、柳浦が指摘した状況に合致している。また柳浦は、現状では時期的な細分はできないとしつつも、口縁形態に新古がある可能性を指摘している。すなわち鳥取においては、上方に大きく押強し内弯する肉厚な口縁から、頭部との境が突尖状となり頭部と厚さが変わらない平板な口縁への変遷を考えている(柳浦前掲)。本遺跡出土例では、入組文を持つ波頭部332や417、418などが柳浦のいう古相の口縁部に相当するものと思われる。一方で新相とされる平板な口縁部は確認できない。したがって本遺跡出土土器は古い様相を示している可能性があるが、「平板な口縁」が果たして鳥取県内に普遍的に分布しているのかについては検討の余地があるように思われる。また、千葉によって崎ヶ鼻2式とされた土器群の位置付けについても今後の重要な検討課題であろう。

崎ヶ鼻式に続く四元式併行期の土器として、最近沖支式が提唱されている(千葉2001)。沖支式～彦崎K2式併行期の資料は崎ヶ鼻式に比べれば少ないが一定量出土している。続く四線文系土器は確認していない。

(3) 本遺跡縄文時代集落の消長

以上述べてきた出土土器の縦年位置付けから想定される集落の消長は第8表のようになる。前期は、西川津式後半の限定期間に、調査地のやや上流に集落が営まれたと考えられる。その後、中期～後期初頭中津式段階までの空白期を経て、福田K2式併行期から布勢式にかけての時期に、調査地付近に再び集落が営まれる。崎ヶ鼻式の段階でピークを迎え、その後は後期中津彦崎K2式の段階まで存続する。後期後葉四線文系土器の段階は空白期となる可能性が高いが、晩期に再び集落が形成され、突帯文期～弥生前期にかけて盛んになる。

第8表 鳥取県中西部縄文時代遺跡の消長

No.	遺跡名	型式	早期	中期	後期	晩期
			西川津式	北白川式	福田K2式	
1	福昌	三朝町	—	—	—	—
2	島	北余町	—	—	—	—
3	津田峰	倉吉市	—	—	—	—
4	横峯	開金町	—	—	—	—
5	森藤第2	東伯町	—	—	—	—
6	南川	名打町	—	—	—	—
7	裏木大神	大山町	○ ○	—	—	—
8	舟手前	淀江町	—	—	—	—
9	鷺ヶ口	淀江町	—	—	—	—
10	富嶽渡り上り	淀江町	— ○ ○	—	—	—
11	大下彌	淀江町	—	—	—	—
12	百坂第7	淀江町	—	—	—	—
13	上福原	米子市	— ○ ○	—	—	—
14	下山衛浦	蒲原町	— ○ ○	—	—	—
15	長山馬籠	蒲原町	— ○ ○	—	—	—
16	井戸草原	蒲原町	—	—	—	—
17	口銅金	会見町	—	—	—	—
18	日久美	米子市	— ○ ○	—	—	—
19	陰田第1	米子市	—	—	—	—
20	陰田第7	米子市	—	—	—	—
21	陰田第9	米子市	○ ○	—	—	—
22	古市河原原	米子市	—	—	—	—

※No.8は第156図の番号と一致する。

※本表の作成には、(濱田1999)及び『山陰の縄文時代遺跡』を参考にした。

※西川津式A・C類及びB類は、時間的前後関係ではなく有無のみを○で示した。○は比率が高いことを示す。

2. 鳥取県中西部における縄文時代集落の動向

第8表は、鳥取県中～西部の縄文時代遺跡のうち、本遺跡との比較において参考となるいくつかの遺跡について、おおまかな消長を示したものである。また、この地域の縄文時代遺跡の動向は濱田竜彦が整理している(濱田1999, 2000, 2002)。これらを参照しながら、本遺跡を含めた周辺遺跡の動向を概観したい。濱田によると、早期段階の遺跡は丘



陵・台地・河岸段丘上に集中しているが、前期には平野部に集落が進出するとされる。氾濫原に立地する本遺跡の集落形成開始も、そうした動向の中で理解されよう。本遺跡の近傍では、大道原・莊田・藏岡第一・塚田の各遺跡で早期の押型文土器が出土しているが、その後の展開は明らかではない。ただし、中高遺跡では西川津式が出土しているようであり、本遺跡との関係を考えるうえで注意される。

西川津式土器の分布をみると、前期段階の拠点集落と考えられる久目美遺跡など多くの遺跡でA・C類とB類が共存しているが、陰田第1・久米第1・佐川第1遺跡などではA類のみが出土している。一方で、B類の比率が高いのは本遺跡や長山馬籠遺跡である。西川津式のこうした偏在性については先述のとおり既にいくつかの指摘がある。西川津式A類は島根県東部・鳥取県西部の海岸部が分布の中心であるに対し、B類は西日本瀬戸内地方や中国地方東部まで広い範囲で分布している（柳浦2001）。本遺跡の様相は、このような分布状況に大きな変更を迫るものではない。ただし、こうした分布状況が何を意味するのかは、本遺跡の性格を評価するうえで重要な問題点である。井上智博は、ある集団ごとにA類・B類といった土器の種類が選択されたという想定のもとに、定着性が低かった山間部の集落ではどちらか片方しか出土しないことが多く、より安定した海浜部の集落では、複数の集団が係わり合ったため両者が共存することが多いと考えている（井上1996, p.173）。この考えに従えば、本遺跡は土器の出土量はともかく、西川津式後半段階の限られた期間に存続した定着性の低い集落ということになるが、先述した矢野編年の妥当性も視野に入れた上で今後検討されるべき課題である。また、海浜部と山間部との移動・交流という視点から考えた場合、山間部の拠点集落と目される長山馬籠遺跡は、B類が卓越する点、西川津式に後続する爪形文をまったく含まずに終息する点が本遺跡と共通しており、比較検討の対象として興味深い存在である。

中期段階では、島・久目美・陰田遺跡など拠点集落では前期から継続するが、統じて遺跡数は減少する。本遺跡においても中期はまったくの空白期である。淀江平野でも富繁渡り上り遺跡などは前期段階で終息するようであるが、本遺跡の南西約3kmの井手跡遺跡では、わずかながら中期の土器が出土しており、集落の形成開始が確認できる。続く後期段階では、大山北麓域の津田峰・森藤第2・南川・大塚・下大畑・百塚第7などの遺跡で住居址が確認されている。ただしこれらはいずれも各遺跡1~2棟の検出であり、土器編年上での1型式程度の短期間に営まれた集落と考えられる。これらの住居址は布勢式～崎ヶ鼻式期に集中しており、本遺跡は、これらの中と有機的な関連をもつ崎ヶ鼻式期の拠点的な集落であった可能性が高い。後期後半段階には本遺跡は再び空白期となるが、井手跡遺跡では当該期の土器がまとめて出土しており、拠点集落が淀江平野へ移動したものと考えられる。

3.まとめに代えて

以上、本遺跡の様相について簡単に概観した。本遺跡の調査の意義として、これまで継続性の高い集落の様相が不明瞭であった阿弥陀川流域の扇状地帯において、前期および後期段階の拠点的集落の存在が明らかになった点をあげられる。また、県内2例目となる分銅形土偶の出土も特筆される。ただし、当地域における土器編年上、前期と後期は問題点が多く、今後の研究により当該期の理解が大きく変わることもある。本遺跡出土土器のより細かな分析を進めるとともに、他地域の動向にも目を向けるなど、検討を深めていこうと思う。

(君鶴)

本報告にあたり、久保権二朗・山田康弘・濱田竜彦・山崎真治の各氏から有益なご教示・ご配慮をいただいた。特に、報告した資料の所を実見していただいた山崎氏の協力無くには本報告はなし得なかつた。上記の方々に末筆ながら厚く御礼を申し上げる次第である。なお、もし理解に誤りがあればその責任は筆者にあることを明記しておく。

【引用・参考文献】

- 井上智博 1991 「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相」『考古学研究』38-2、考古学研究会
- 井上智博 1996 「山陰・西川津式土器の上部型式構造と恩原2遺跡土器群のしめる位置」『恩原2遺跡』岡山大学考古学研究室第28回山陰考古学研究集会事務局編 2001 「山陰の縄文時代遺跡」
- 千葉 盛 1989 「縄帶文系土器群の成立と展開」『史料』72-6、史学研究会
- 千葉 盛 1990 「近畿北部・山陰東部の成立期縄帶文土器」『小森岡遺跡』竹野町教育委員会
- 千葉 盛 2001 「沖丈遺跡出土縄文後期土器の編年的意義」『沖丈遺跡』邑智町教育委員会
- 濱田竜彦 1999 「米子平野の縄文遺跡」『伯耆文化』創刊号、伯耆文化研究会
- 濱田竜彦 2000 「大山山麓の縄文時代遺跡」『山陰の縄文時代遺跡』山陰考古学研究集会
- 濱田竜彦 2002 「山陰の縄文時代後期・晩期の集落一大山山麓地域を中心にー」『考古学ジャーナル』485
- 柳浦俊一 2000 a 「山陰地方縄文時代後期初頭～中頃の土器編年」『島根考古学会誌』17、島根考古学会
- 柳浦俊一 2000 b 「山陰地方における崔田K2式並行の土器群について」『古代吉備』22、古代吉備研究会
- 柳浦俊一 2001 「山陰地方における縄文前期土器の地域編年」『島根考古学会誌』18、島根考古学会
- 久野健一 2002 「中四国地方における縄文時代早期末期初頭の土器編年」『瀬戸内海の考古学』上巻、古代吉備研究会

2. 弥生時代前期の壺形土器について

1. はじめに

1区河道 S D 1 および黒色土包含層からは、多量の弥生時代前期の土器が出土した。コンテナ数に換算して約45箱である。阿弥陀川下流域周辺では、名和町大塚岩田遺跡など近年になって弥生時代前期の集落遺跡の調査が行われ良好な資料が出土しているが、分析対象としてはいささか分母不足であった。本遺跡出土の土器は自然河道からの出土であるが、近接して存在するとと思われる集落の実態を反映したものと考えられ、時期的にも前期中葉から後葉を中心としたまとまりのある資料群である。このうち、本論では從来編年の指標とされてきた壺形土器の形態を分析し、その変化の方向性を検証することを目指す。方法として、まず型式分類と組列の方向性の検討を行う。次にそれぞれの形態に付与される装飾的属性と出土する遺跡を検討し、既存編年の検証を行う。分析対象資料は、本遺跡および、名和町大塚岩田遺跡⁽¹⁾、大山町今津岸の上遺跡出土資料⁽²⁾とする。本遺跡では報告書掲載遺物以外にP L 31右下に掲載した壺1点を加えているが、他の遺跡は報告書掲載遺物のみを扱う。記載する資料番号は各報告書の掲載番号である。

2. 分類

広口壺を対象とする。器形全体を窺える資料が少ないので、口縁部から胴部上半にかけての形状により分類を行った(第157図)。ただし、頸部のみの破片であっても分類が可能なものも含めており、必ずしも各遺跡出土の個体数を示すものではない。

A類 口縁部は短く外反し、頸部から胴部にかけて口縁部径をこえて直線的に広がるもの。

(妻木法大神遺跡：17・81・82・198・218)

B類 やや緩やかに立ち上がる頸部から口縁部が丸く外反するもの。口縁部はA類より長い。

(妻木法大神遺跡：16・88・199・204・205・209・217・221・222)

C類 頸部から口縁部にかけて緩やかに外反するもの。口縁部は長い。

(妻木法大神遺跡：200、大塚岩田遺跡：42)

D類 脇張りの胴部から口縁部にかけて反転D字状に大きく外反するもの。

(妻木法大神遺跡：85・201・214・215・216・非掲載遺物P L 31、大塚岩田遺跡：45)

E類 頸部は間延びして短い筒形をなし、大きく外反する口縁部に緩やかにつながるもの。

(妻木法大神遺跡：87・95・213、大塚岩田遺跡：14・70・71・72、今津岸の上遺跡：34・38・43・56)

F類 口縁部は屈曲して短く外反し、頸部は筒形をなす。頸部から胴部にかけて屈曲する。

(大塚岩田遺跡：66・69)

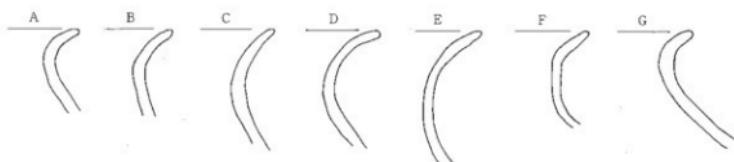
G類 口縁部は短く丸く外反し、頸部から胴部

にかけて大きく張りだし、丸い胴部につ
ながるもの。

(妻木法大神遺跡：208・96)

第9表 遺跡別出土数

	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類
妻木法大神遺跡	5	9	1	6	3	0	2
大塚岩田遺跡	0	0	1	1	4	2	0
今津岸の上遺跡	1	0	0	2	4	0	0



第157図 壺形土器の分類

第10表 施文の出現頻度

	段	削出突帯	貼付突帯	沈線1~2条	沈線3~5条	沈線6条~
A類	3	1	0	1	0	0
B類	5	0	0	4	0	0
C類	0	1	0	0	0	0
D類	0	0	1	2	2	1
E類	0	0	3	0	2	4
F類	0	0	0	0	0	0
G類	0	0	0	0	1	1

(数値は施文の出現回数を示す)

型式組列A-B-C-D-Eは、短く外反する口縁部をもつA類と、発達した口縁部と筒形の頸部をもつE類を対極とする組列として設定した(表157)。層位的関係から変化の方向性を検証することはできないが、羽合町長瀬高浜遺跡では、包含層からA・B類を含む遠賀川系土器と共に外側接合、ハケ調整など遠賀川系土器の製作技法を導入した突帯文系の土器が出土している⁽¹⁾。島根県北講氏氏元遺跡などでも、A・B類に伴うとみられる突帯文系統の土器が出土している⁽²⁾。一方、E類にみられる口縁部や頸部の発達は次の中期段階に顕著となる。これらのことから、変化の方向性としてはA→B→C→D→Eと考えられる。F・G類は、口縁部と頸部の発達という視点では組列上にのらないタイプである。F類はE類から派生したものであろうか。周辺の遺跡では皆見に触れない。G類は次のⅡ様式にみられるタイプである。

3. 施文の検討

壺形土器には、頸部から胴部にかけて段、突帯、沈線などが施されることが多い。これは佐原真の分類以来、常に編年指標とされており、遠賀川系土器の編年研究はまさに壺に施された施文によってなされてきたといつても過言ではない。ここでは前項で分類した型式に付与される施文の分析を行う。本来的には文様同士の組み合わせをも加味すべきであるが、煩雑になることから、それぞれの施文の出現頻度をカウントすることにしたい。例えば1つの個体に段と沈線が施される場合には、段1、沈線1とカウントしている。

施文の種類は段、削出突帯、貼付突帯、沈線に分けた。沈線は、便宜的に1~2条、3~5条、6条以上の3種類に分けた。大きな特徴は、①段および削出突帯がD類以降には出現しないこと、②貼付突帯はD、E類のみにみられること、③沈線6条以上のものはA・B・C類にはみられないこと、である(表10)。型式組列A→B→C→D→Eが正しいなら、(段、削出突帯)→(貼付突帯、3条以上の多条沈線文)ということができる。とくに段はA・B類のみにみられるもので、E類に多い6条以上の沈線文とは対極の位置をなす。こうした特徴は、各属性の総数が少ないため統計学的な分析としてはやや信頼性に欠く部分もあるが、およそその傾向を示すものとしては有効であろう。

4. 出土状況の検討

阿弥陀川下流域では弥生時代前期の遺跡として、本論で検討した3遺跡のほか、妻木法大神遺跡の南側に位置する塚田遺跡⁽³⁾、阿弥陀川左岸に所在する上野遺跡⁽⁴⁾右岸に位置する茶畑六反田遺跡の合わせて6遺跡が知られている(図158)。その大半が包含層からの出土であり層位学的見地からの検証に耐えうる資料は少ない。こうした中で大塚岩田遺跡では環濠と推定される溝状構造から多数の土器が出土している⁽⁵⁾。少なくとも4条の溝がほぼ平行して掘削されており、層位的なばらつきが少ない出土状況からみて一括りの高い資料として評価されるものである。ここではA・B類はみられず、E類が多い。SD-5では多条沈線文をもつE類とともにF類が出土しており両者が共伴するものと思われる。今津岸の上遺跡出土資料は、半円形に渦曲する環濠内から出土したものであり、時間幅は狭いものと思われる。D類、E類以外は出土していない。実測図に不適切な部分があるためカウントからは除外したが、口縁部が発達した個体が顕著にみられるため、相当数のE類が含まれるものと思われる。以上2遺跡の検討から、少なくともA・B類はC類以降のタイプとは共伴しないと推察される。これを見ると施文の検討結果と突き合わせると、(段)→(削出突帯・貼付突帯、3条以上の沈線文)となる。



第158図 阿弥陀川下流域の弥生時代前期の遺跡

5. 既存編年との整合性

次に既存の編年との整合性を検証する。施文状況の検討からは（段・削出突帯）→（貼付突帯・3条以上の沈線文）という施文の流れを想定した。一方、出土状況の検討からは（段）→（削出突帯・貼付突帯・3条以上の沈線文）となり、両者の検討からは（段）→（削出突帯）→（貼付突帯・3条以上の沈線文）という結果となる。

山陰地域では、前期を3期もしくは4期に区分することが一般的である⁽⁸⁾⁽⁹⁾。3段階区分は、かつて佐原真が段→削出突帯→貼付突帯という施文の変化をもとに古段階、中段階、新段階の3つに分けたことに基づく。4段階区分はこれに沈線文の多条化、段の減少、器形の変化などを加味して分類しており本報告も4段階区分に従っている。前期後半段階における沈線文の多条化もII様式の櫛描文へのエピローグの一つとして理解されている。

こうした中で本項での検討結果を照合させると、（段）→（削出突帯）→（貼付突帯・3条以上の沈線文）という全体的な流れはおおむね既存の4期区分と整合する。具体的には、段がI-1からI-3様式、削出突帯がI-1からI-3様式、貼付突帯と3条以上の沈線文がI-3からI-4様式に比定される。削出突帯と貼付突帯の前後関係については、近畿において両者がほぼ重複して存在することが議論されており、いま少し良好な一括資料の増加を待ちたい。段はA類、B類ともに幅が狭く浅いものであり既存編年のI-2・3段階のものであることから、型式組列A→B→C→D→Eは既存の4期区分編年のI-2様式からI-4様式の壺形土器の変化を表したものといえる。

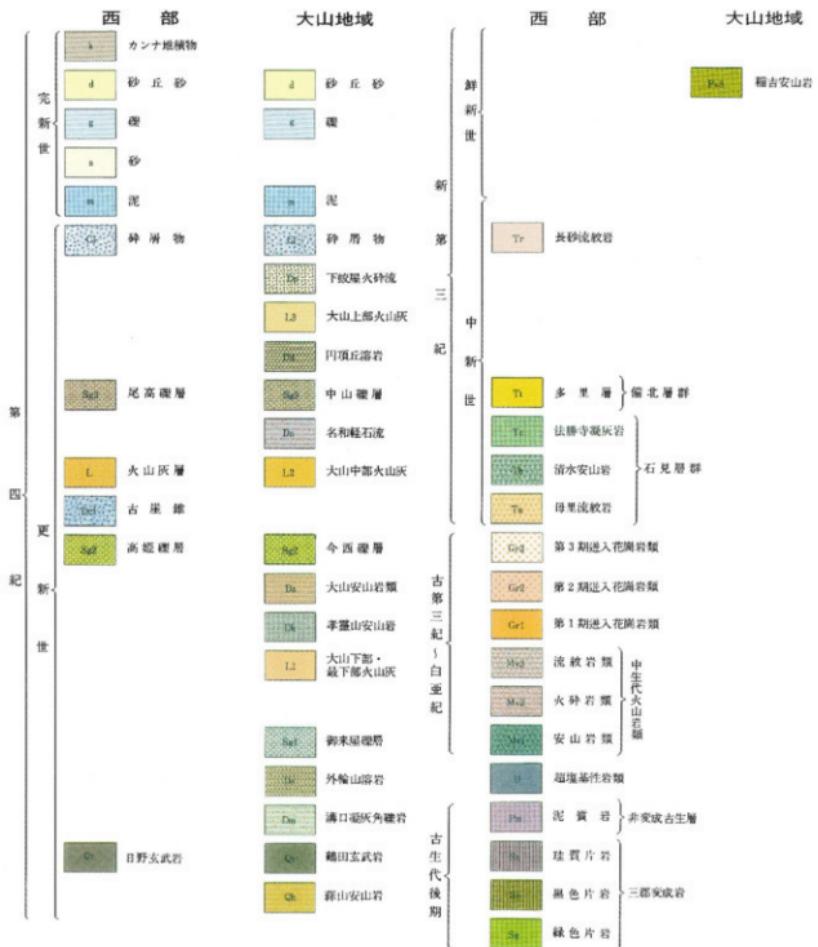
本論で導き出した結果は統計学的に信頼性が低く仮定の域を出ない。今後の資料の増加を待って隨時検証されなければならない。ご批判ご叱責を乞う次第である。

(岡野)

参考文献

- (1) 西川 篤・岡野雅則編 2001『大塚古田遺跡・大塚根岸遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書71 鳥取県教育文化財団
- (2) 中山和之編 1991『今津岸の上遺跡発掘調査報告書』淀江町埋蔵文化財調査報告書第19号 淀江町教育委員会
- (3) 財団法人鳥取県教育文化財団編 1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書VI』鳥取県教育文化財団報告書14 財団法人鳥取県教育文化財団
- (4) 赤澤秀則編 1989『北瀬武氏元遺跡』夷島町教育委員会
- (5) 大山町教育委員会編 1979『保田遺跡』大山町埋蔵文化財発掘調査報告書V 大山町教育委員会
- (6) 大山町教育委員会編 1981『原・裁向第一・裁向第二・上野第二遺跡』大山町埋蔵文化財発掘調査報告書IV 大山町教育委員会
- (7) 中川和敏・土橋誠ほか編 1997『京都府遺跡調査報告書第22号雲宮遺跡』財团法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- (8) 西伯耆発生集落検討会編 2001『山陰地方における弥生時代前期の地城相』第3回西伯耆弥生集落検討会資料集
- (9) 正岡睦夫・松本岩雄編 1992『弥生土器の様式と編年』(山陽・山陰編) 木耳社

図 版
PLATE

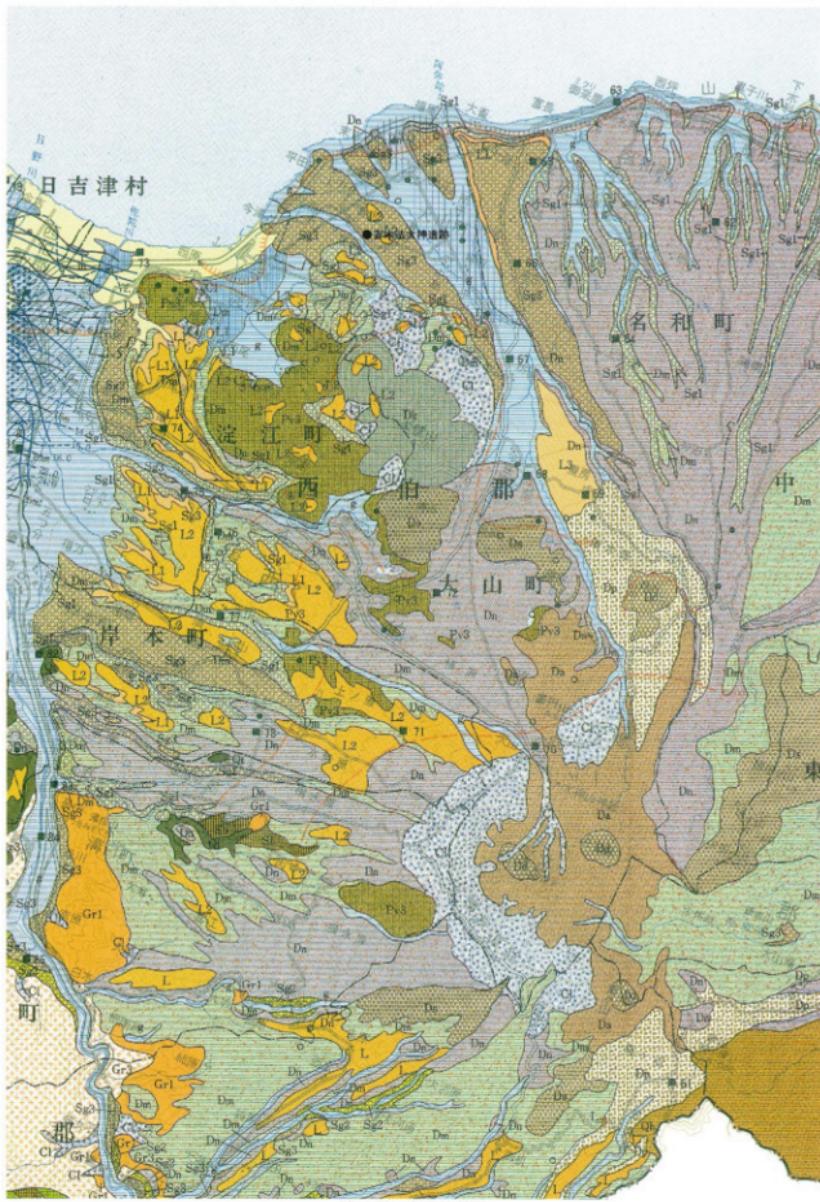


- (1) 自由面地下水の取得可能量が一井当り(口径300mm)
500~1000m³/日の地城
- (2) 被压地下水の取得可能量が一井当り(口径300mm)
1000m³/日程度の地城
- (3) 自由面地下水の潜流地帯(とくに河川水によって養われている地城)

浅層地下水水位等高線

* 温泉

■ 試掘柱状図地点



大山周辺水理地質図



1. 遺跡周辺の地形（1）（北より）



2. 遺跡周辺の地形（2）（東より）



1. S I I (北より)



2. S I I 周辺ビット (北より)



1. SK 1 (北東より)



4. SK 3 (北より)



2. SK 2 (南より)



5. SK 4 (南より)



3. SK 3 (北より)



6. SK 5 (北東より)



1. SK 6 (北東より)



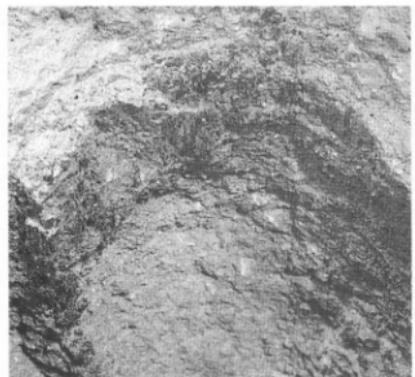
4. SK 8 (西より)



2. SK 7 (北より)



5. SK 12 (東より)



3. SK 7 炭化木材出土状況 (南東より)



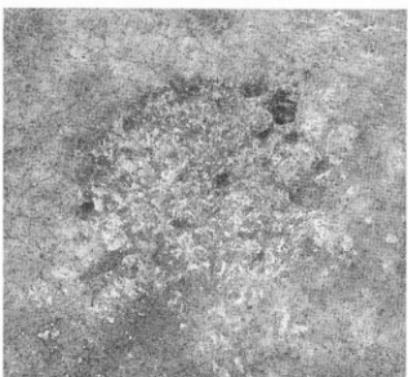
6. SK 11 (北東より)



1. SK 13 (北西より)



4. SK 16 土層断面 (南より)



2. SK 14 (北東より)



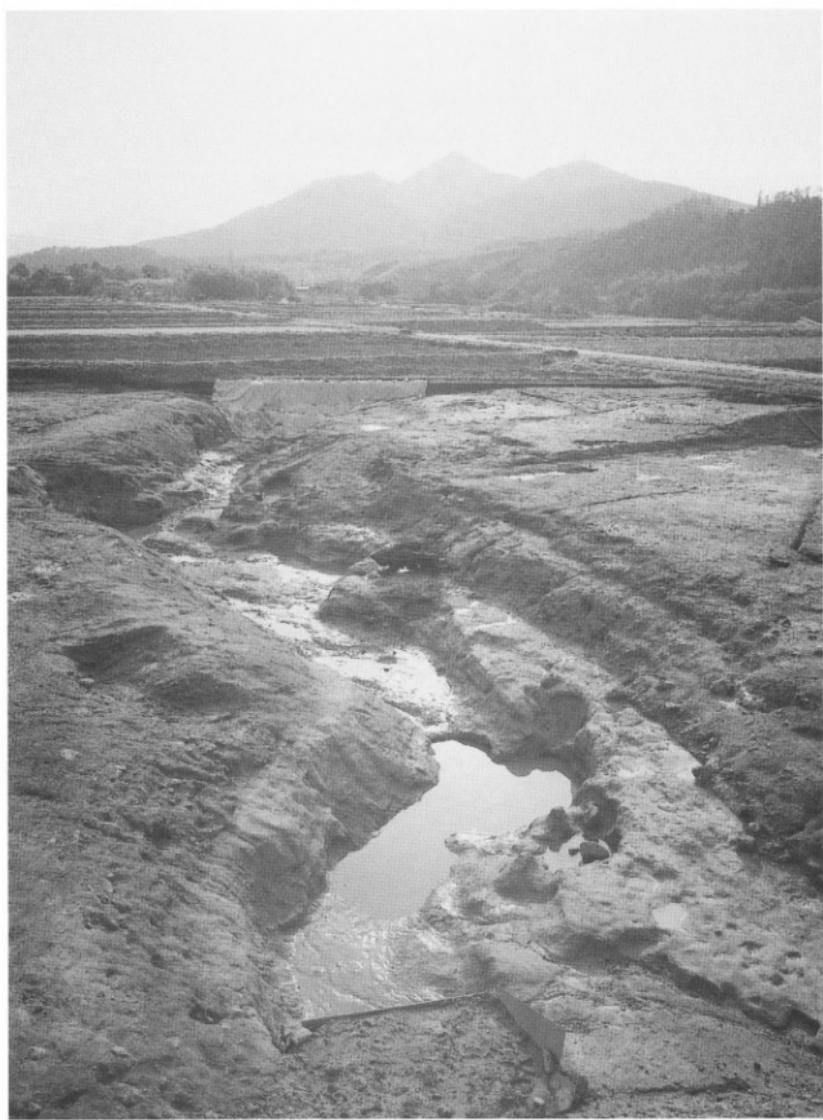
5. SK 15 (南東より)



3. SK 17 (北より)



6. SK 15 土層断面 (南より)



河道 S D 1 (北西より)



1. 河道 S D 1 北東側完掘状況（北西より）



2. 河道 S D 1 土層断面（B-B'ライン）（西より）



1. 河道SD1 土層断面（C-C'ライン）（東より）



2. 河道SD1 縄文時代後期以前流路（IV層～X層）土層断面（A-A'ライン）（北より）



1. 河道SD1 弥生時代流路（I～III層）北西側完掘状況（南東より）



2. 河道SD1 III層流木出土状況（1）（南東より）



3. 河道SD1 III層流木出土状況（2）（南西より）



4. 河道SD1 III層遺物出土状況（1）（西より）



1. 河道SD1 弥生時代流路（I～III層）南東側完掘状況（南東より）



2. 河道SD1 弥生時代流路（I～III層）土壤断面（B-B'ライン）（東より）



1. 河道SD1 弥生時代流路（I～III層）土層断面（A-A'ライン）（北東より）



2. 河道SD1 III層遺物出土状況（2）（北東より）



1. 河道SD1 III層遺物出土状況（3）（南西より）



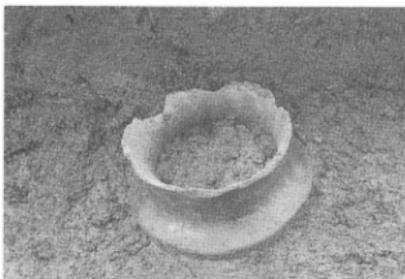
2. 河道SD1 III層遺物出土状況（4）（南東より）



3. 河道SD1 III層炭化木材出土状況（北西より）



4. 河道SD1 III層遺物出土状況（5）（南西より）



1. 河道SD1 Ⅲ層遺物出土状況(6)(北東より)



3. 河道SD1 Ⅲ層遺物出土状況(8)(南西より)



2. 河道SD1 Ⅲ層遺物出土状況(7)(南東より)



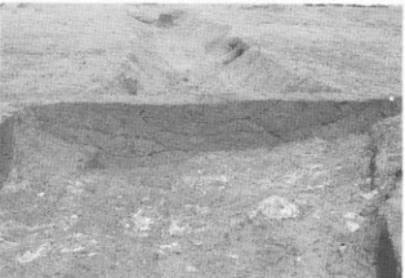
4. 河道SD1 Ⅲ層遺物出土状況(9)(西より)



5. 河道SD2 (南東より)



6. 河道SD2 土層断面(南東より)



7. SD3 土層断面(南西より)



1. SD 3 (北東より)



2. SD 5 (南東より)



3. 河道 SD 6 (北西より)



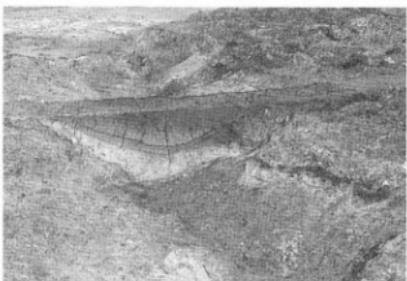
4. 河道 SD 6 粘土層検出状況 (西より)



5. 河道 SD 6 土層断面 (東より)



1. SD 7 (北より)



2. SD 7 土層断面 (南より)



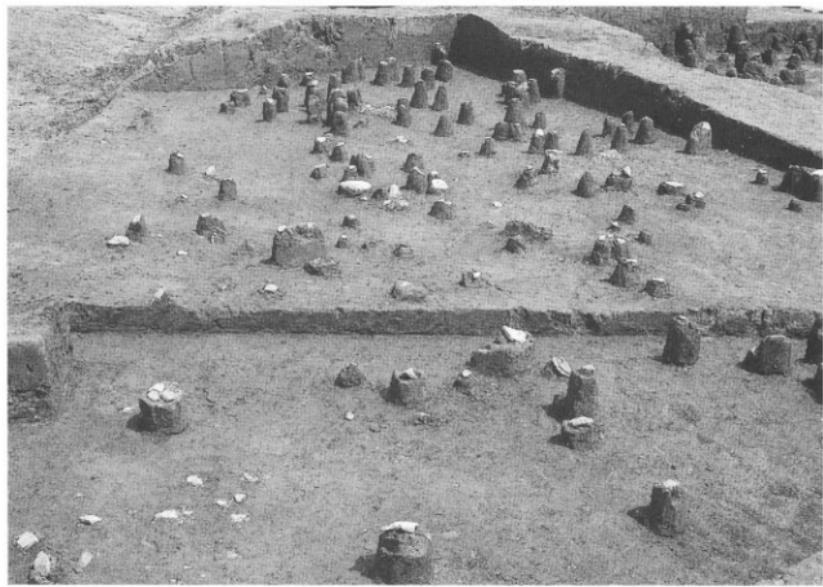
3. 河道SD 8 土層断面 (北西より)



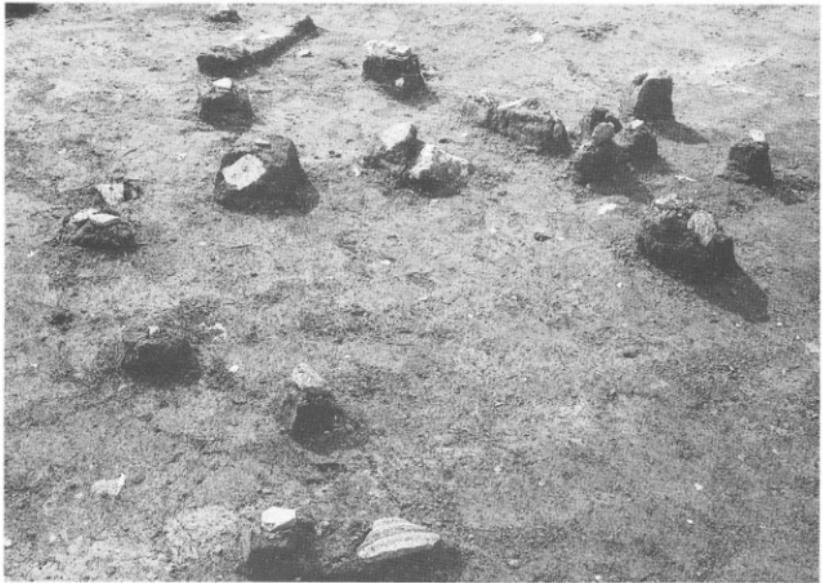
4. 河道SD 8 (南東より)



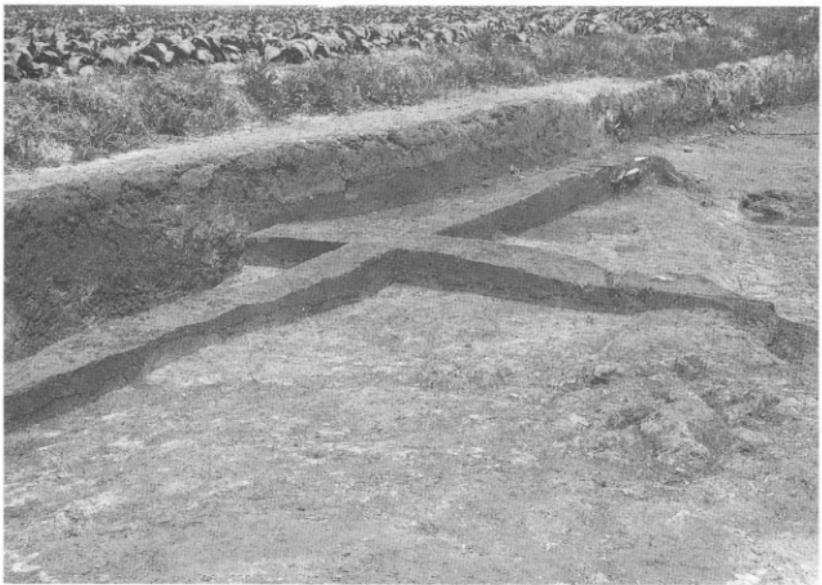
1. 黒色土包含層土層断面（1）（北西より）



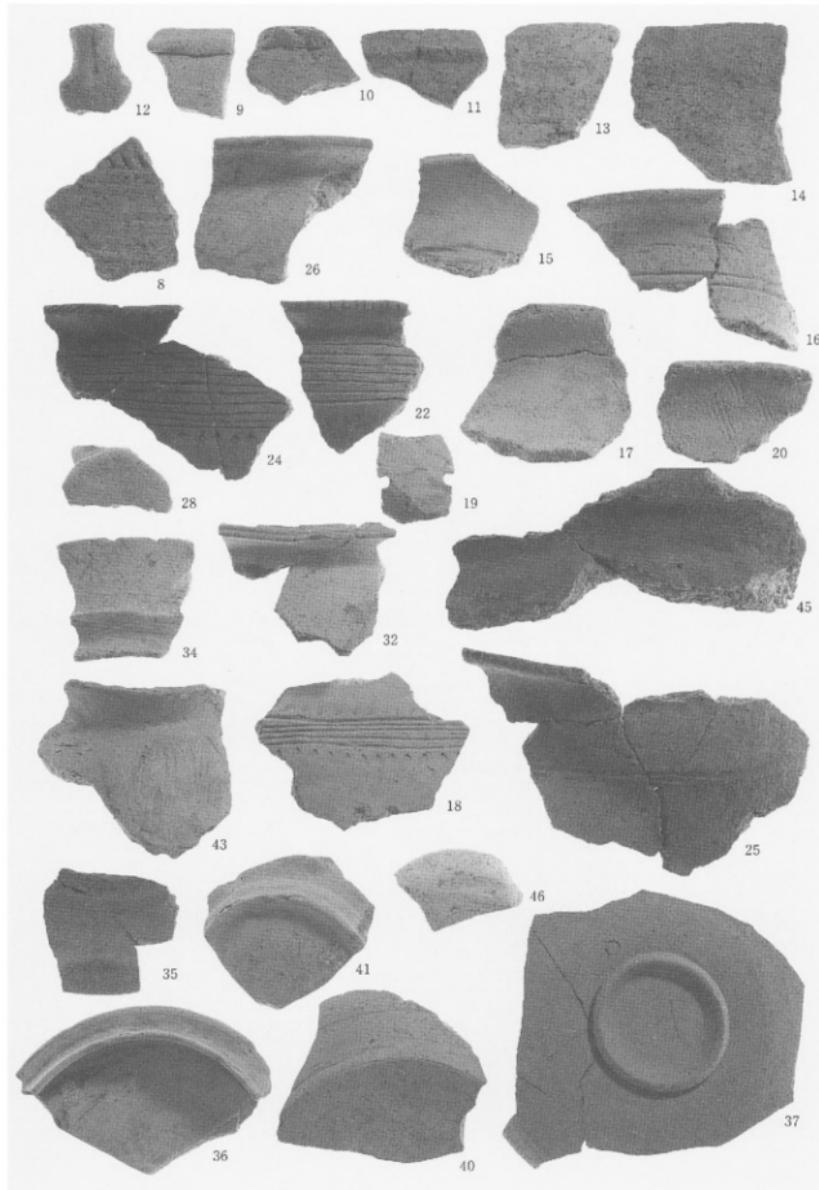
2. 黒色土包含層遺物出土状況（1）（北西より）



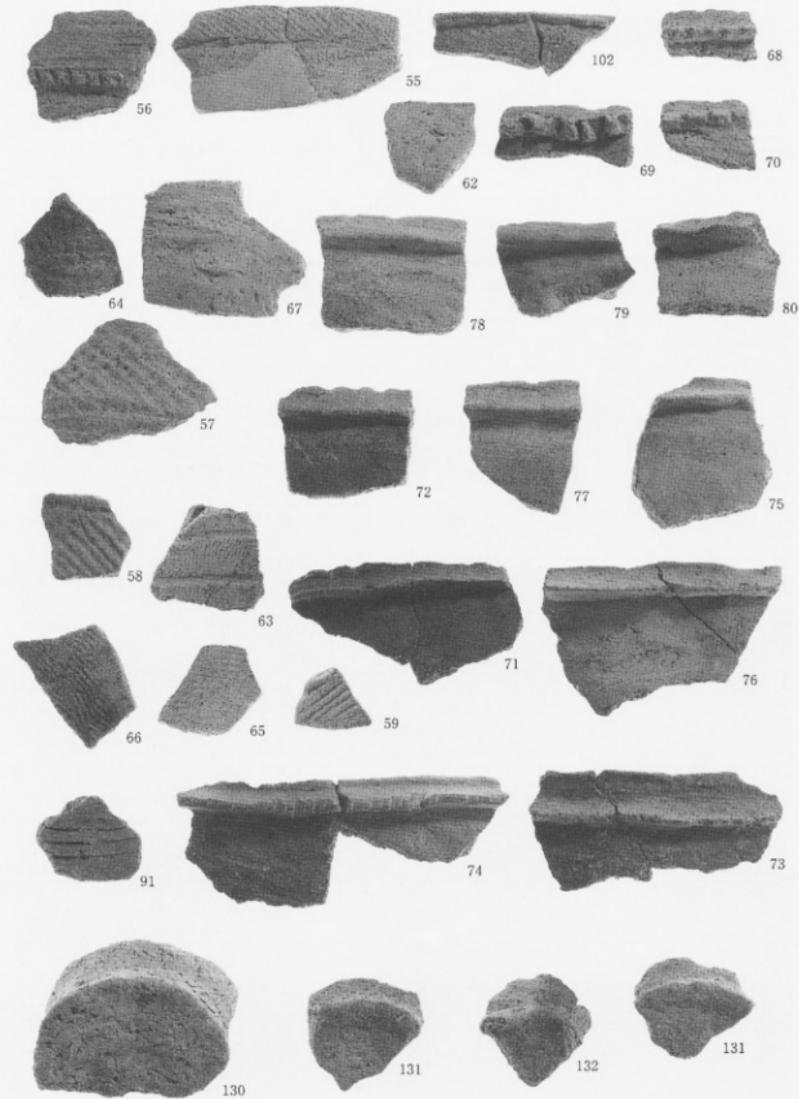
1. 黒色土包含層遺物出土状況（2）（南西より）



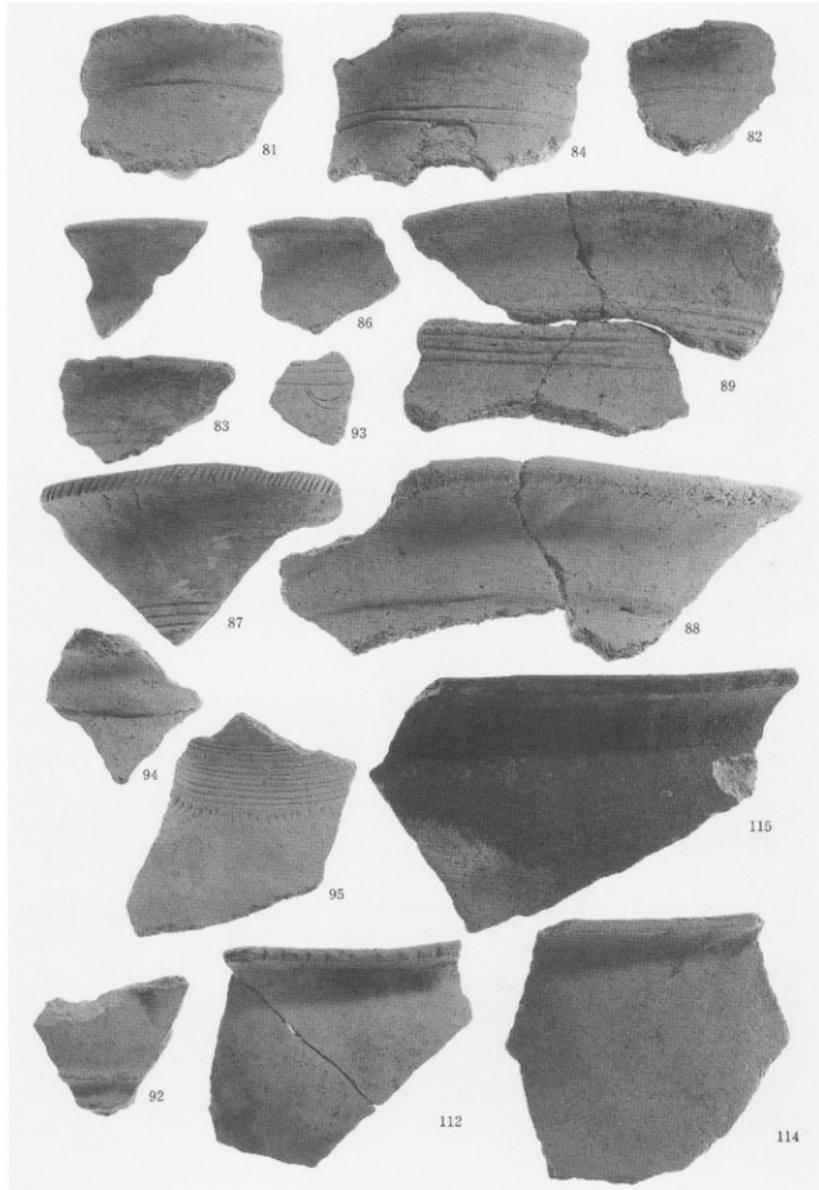
2. 黒色土包含層土層断面（2）（南より）



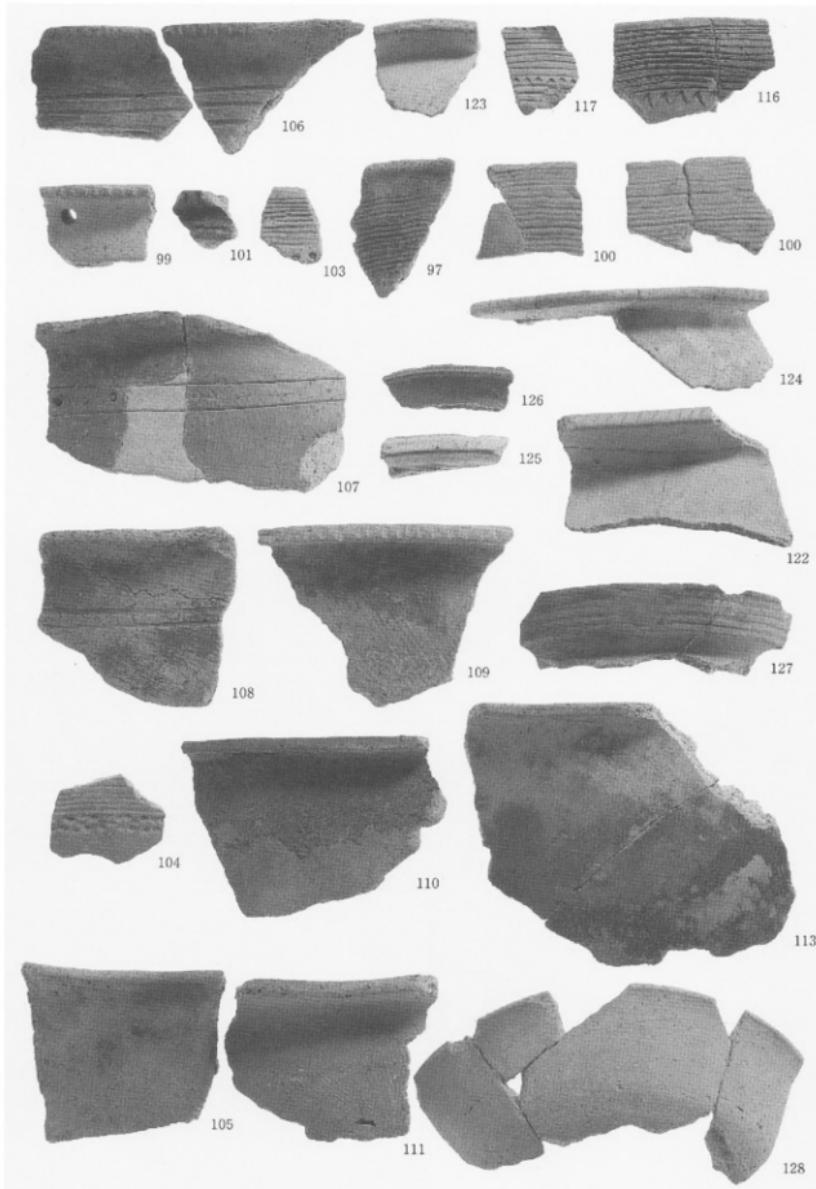
河道 S D 1 I 层出土土器



河道 S D 1 II 層出土土器 (1)



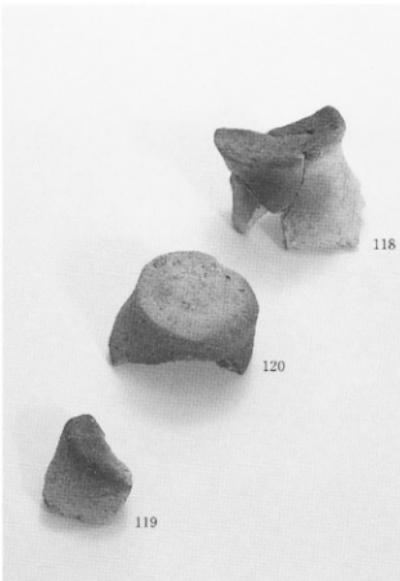
河道 S D 1 II 层出土土器 (2)



河道 S D 1 II 層出土土器 (3)



1. 河道 S D 1 II 层出土土器 (4)



2. 河道 S D 1 II 层出土土器 (5)



3. 河道 S D 1 II 层出土土器 (6)



121



205

1. 河道 S D 1 II 层出土土器 (7)



140

2. 河道 S D 1 II 层出土土器 (8)



221

4. 河道 S D 1 II 层出土土器 (10)



222

3. 河道 S D 1 II 层出土土器 (9)



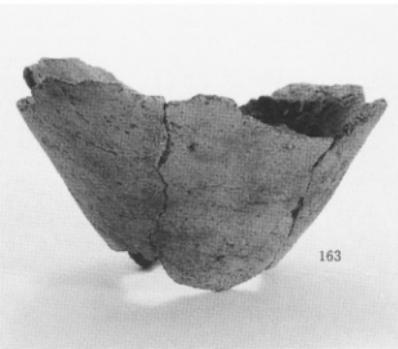
238

6. 河道 S D 1 II 层出土土器 (12)



218

1. 河道 S D 1 II 层出土土器 (13)



163

3. 河道 S D 1 II 层出土土器 (15)



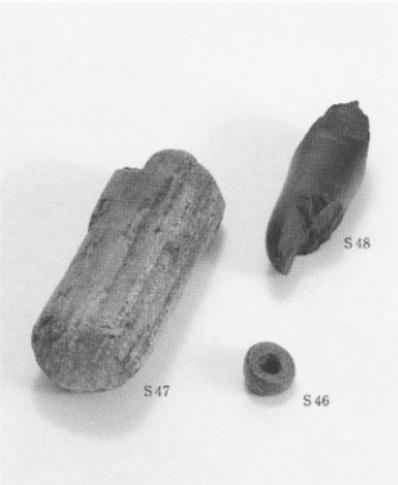
167

4. 河道 S D 1 II 层出土土器 (16)



197

2. 河道 S D 1 II 层出土土器 (14)



S47

S46



S48

5. 河道 S D 1 II 层出土石器



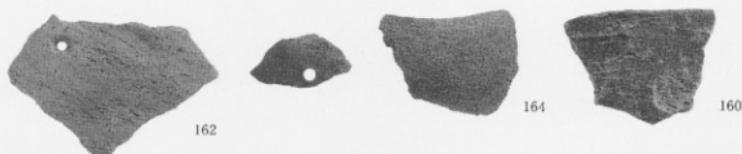
1. 河道 S D 1 II 层出土土器 (底部 1)



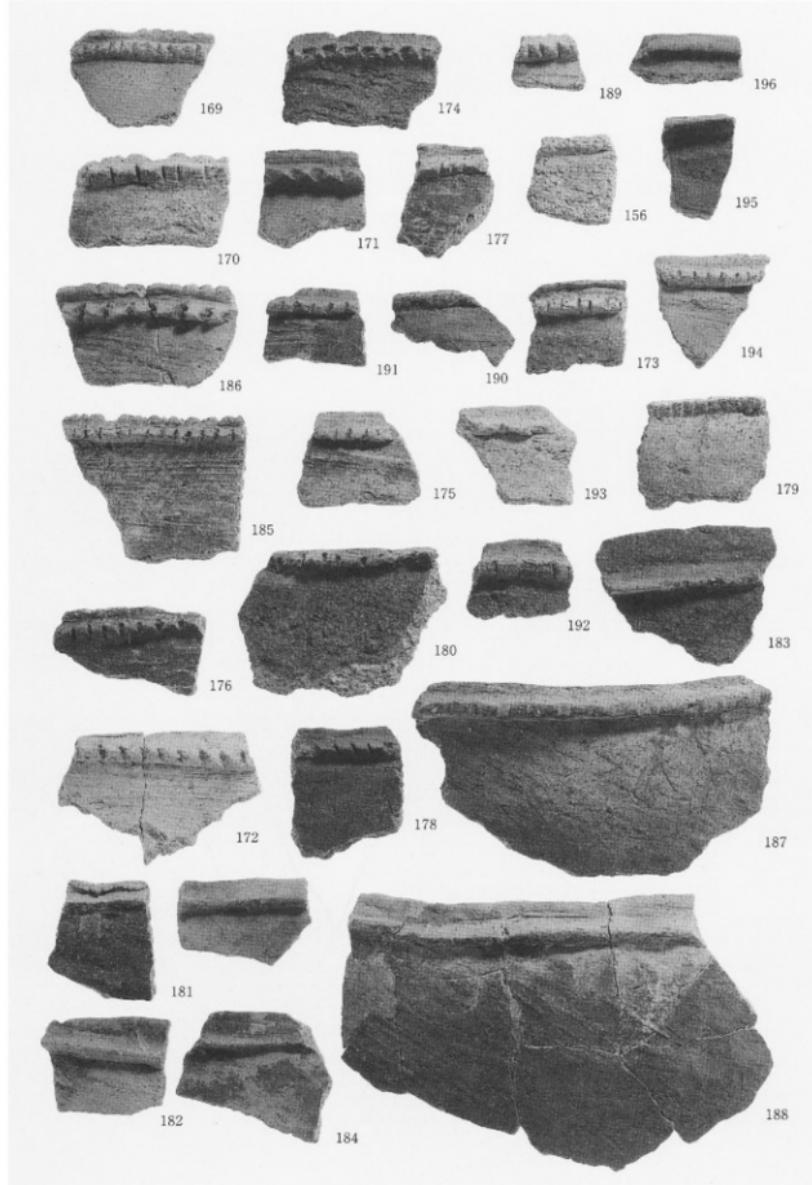
2. 河道 S D 1 II 层出土土器 (底部 2)



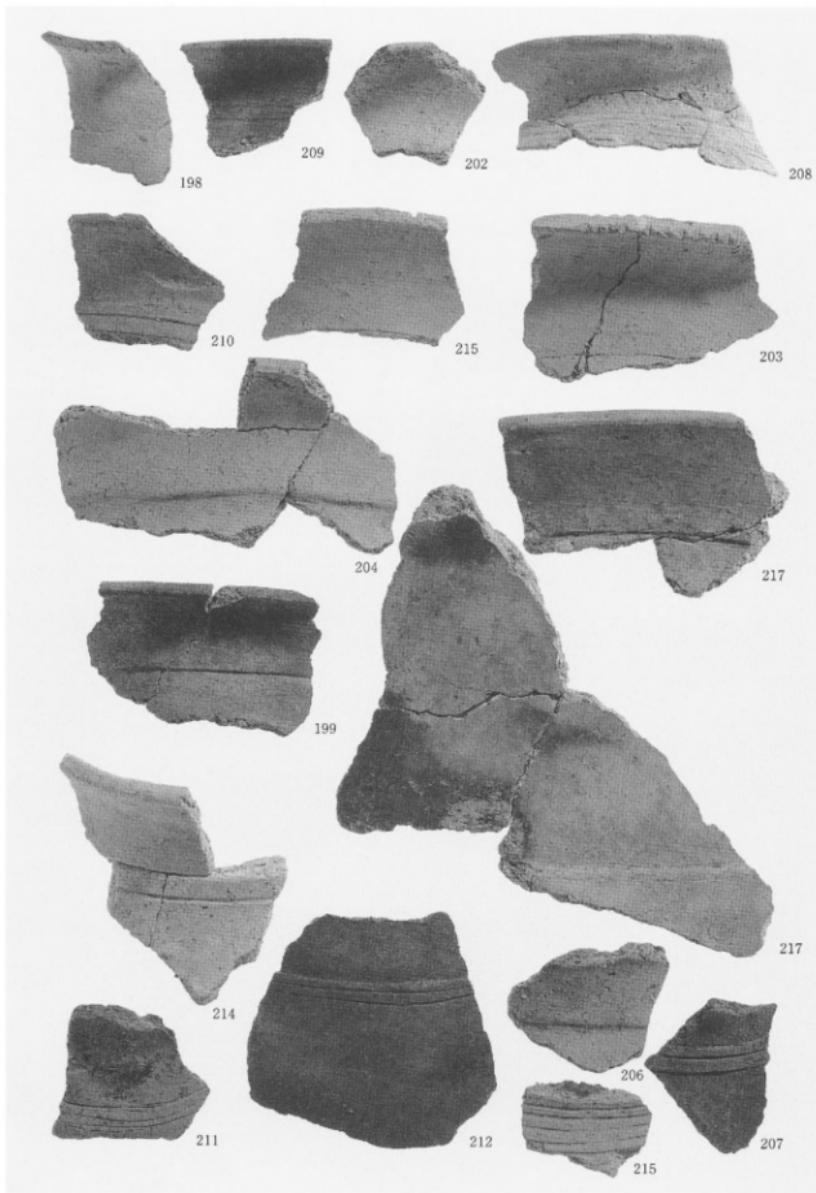
河道 S D 1 Ⅲ層出土土器（底部）



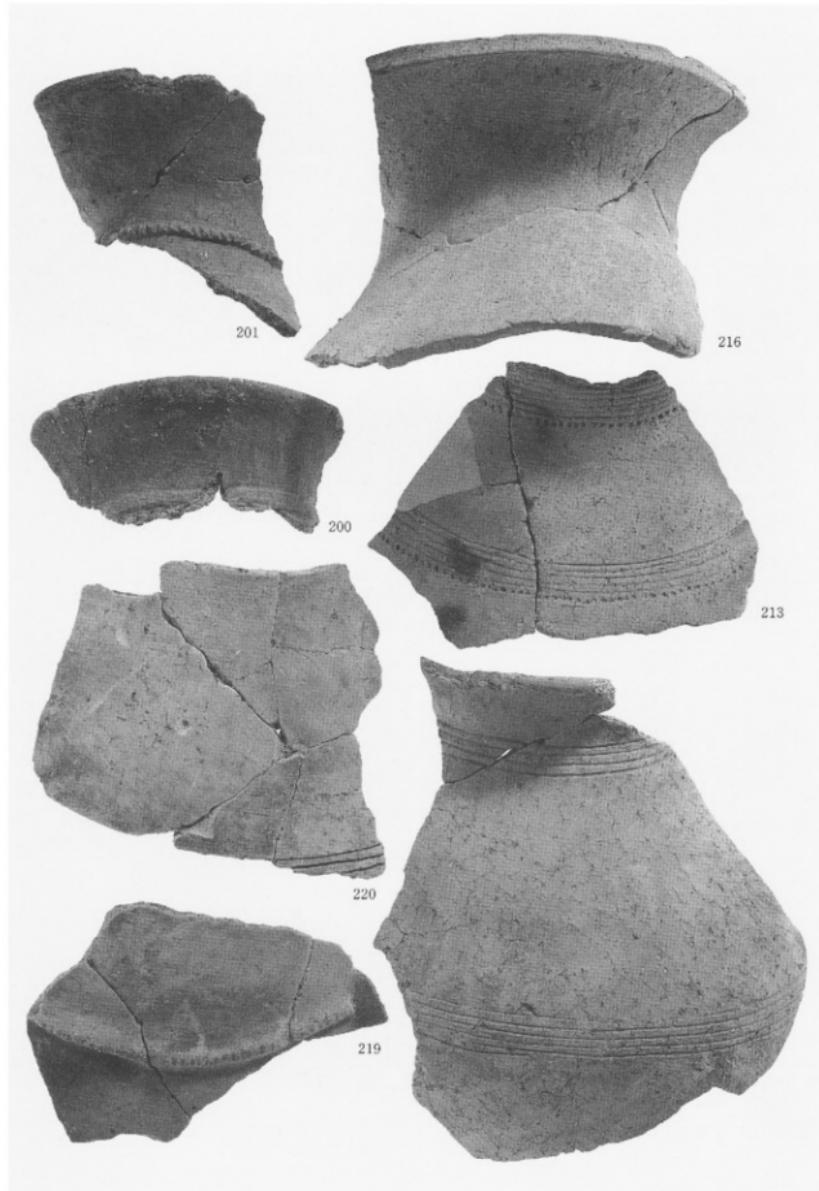
河遺 S D 1 III 層出土土器 (1)



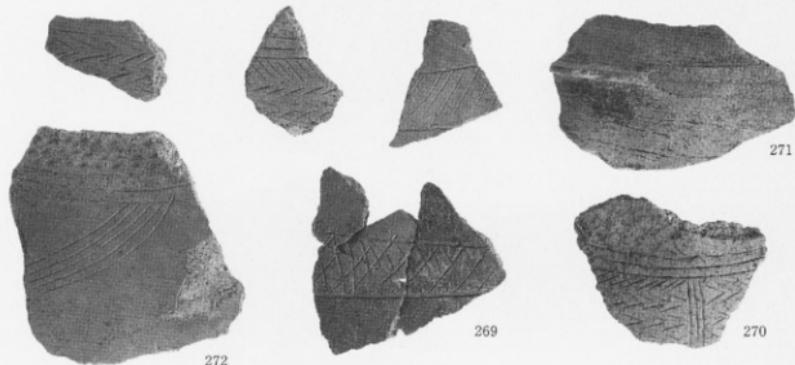
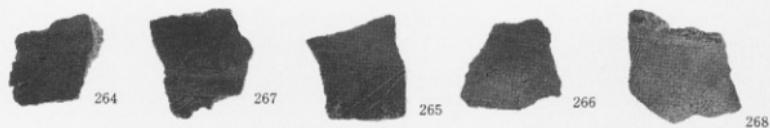
河道 S D 1 Ⅲ層出土土器 (2)



河遺 S D 1 III層出土土器 (3)



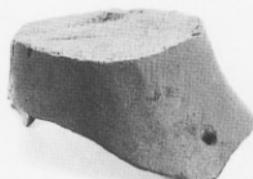
河道 S D 1 Ⅲ層出土土器 (4)



1. 河道 S D 1 III層出土土器 (5)



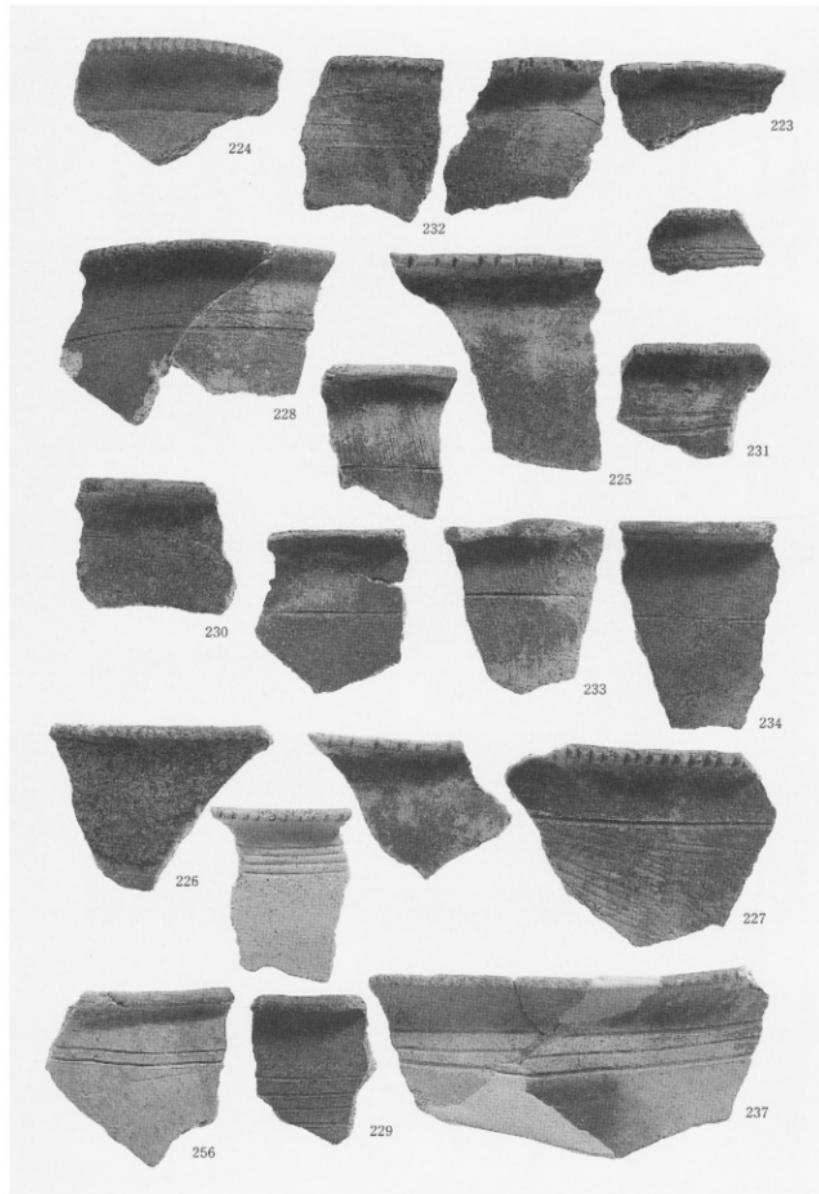
2. 河道 S D 1 III層出土土器 (6)



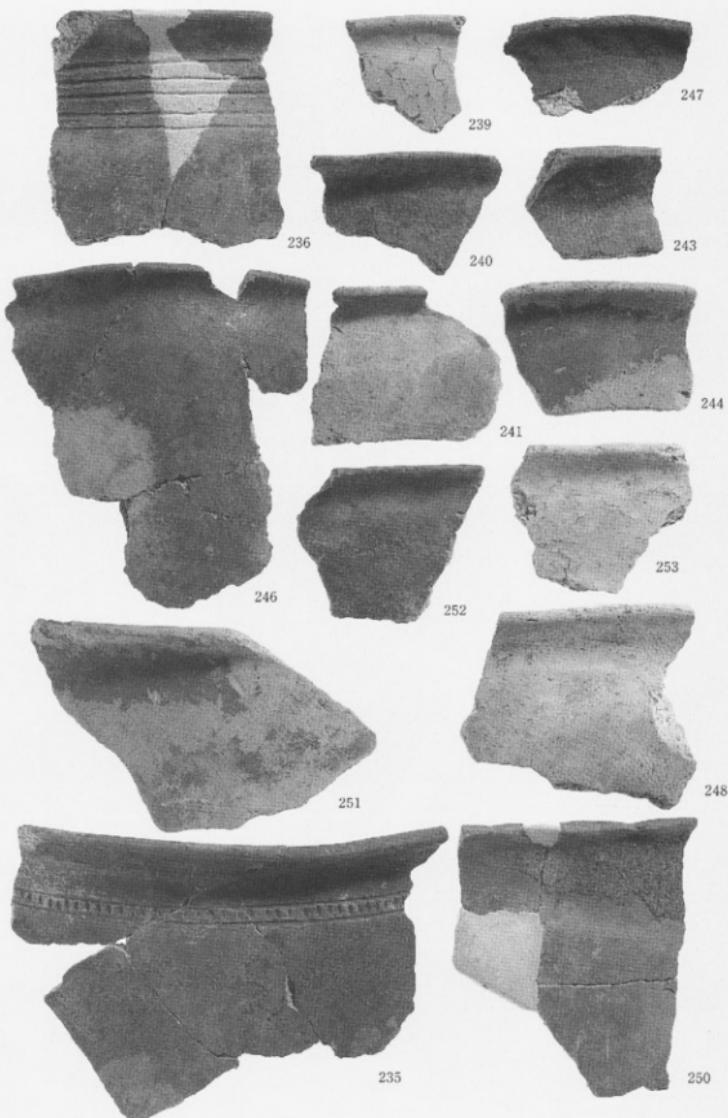
3. 河道 S D 1 III層出土木製品



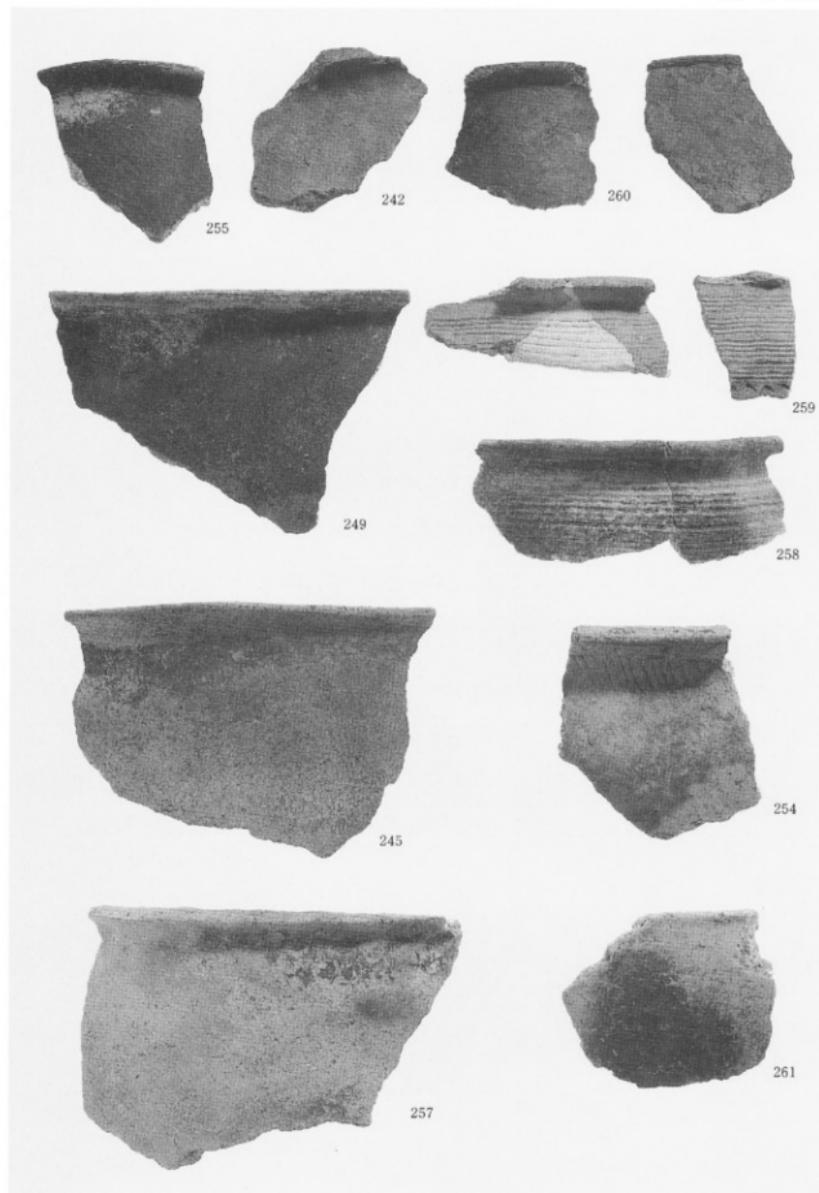
4. 河道 S D 1 III層出土炭化木片



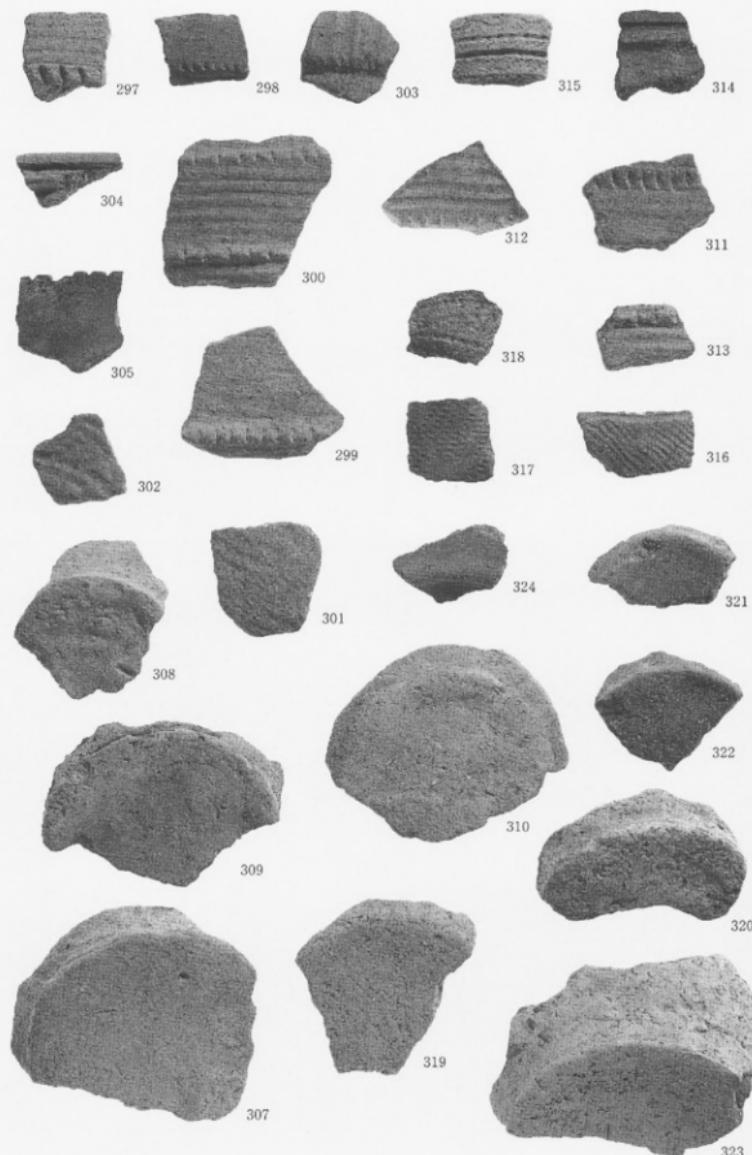
河道 S D 1 III 层出土器 (7)



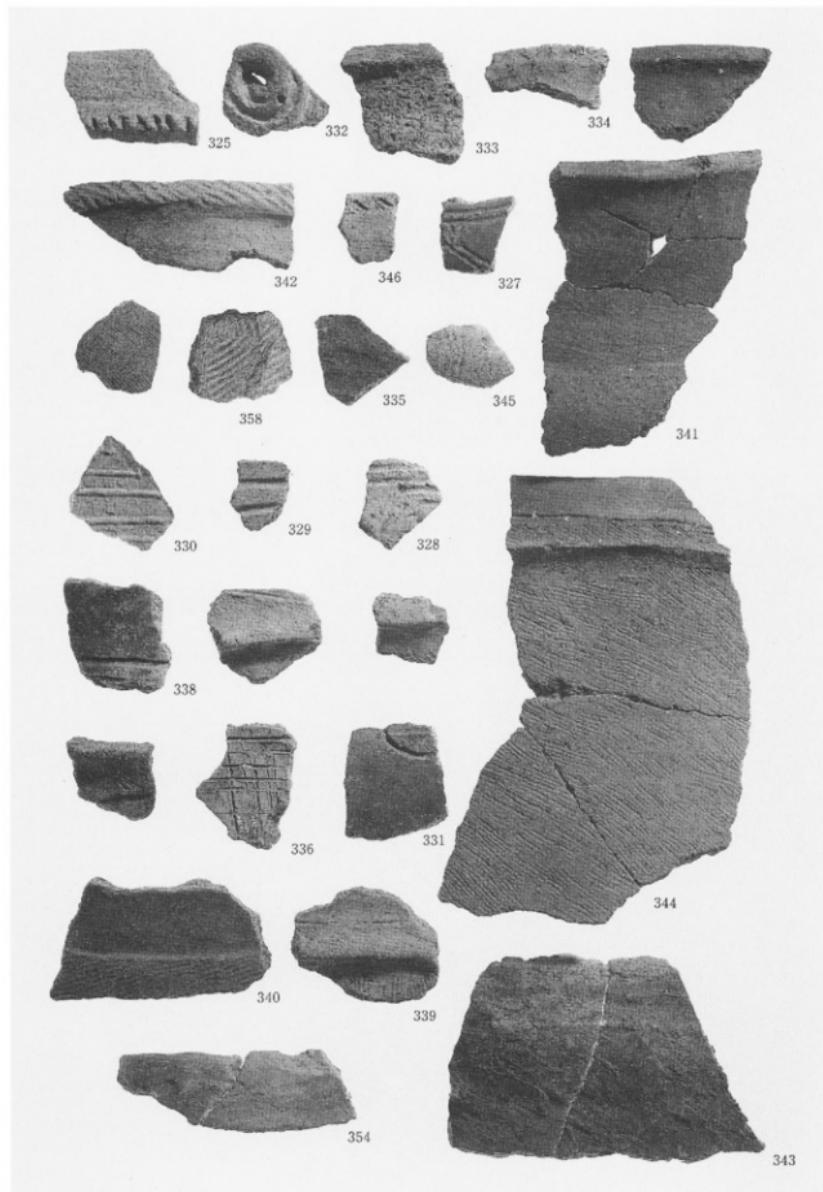
河道 S D 1 III 层出土土器 (8)



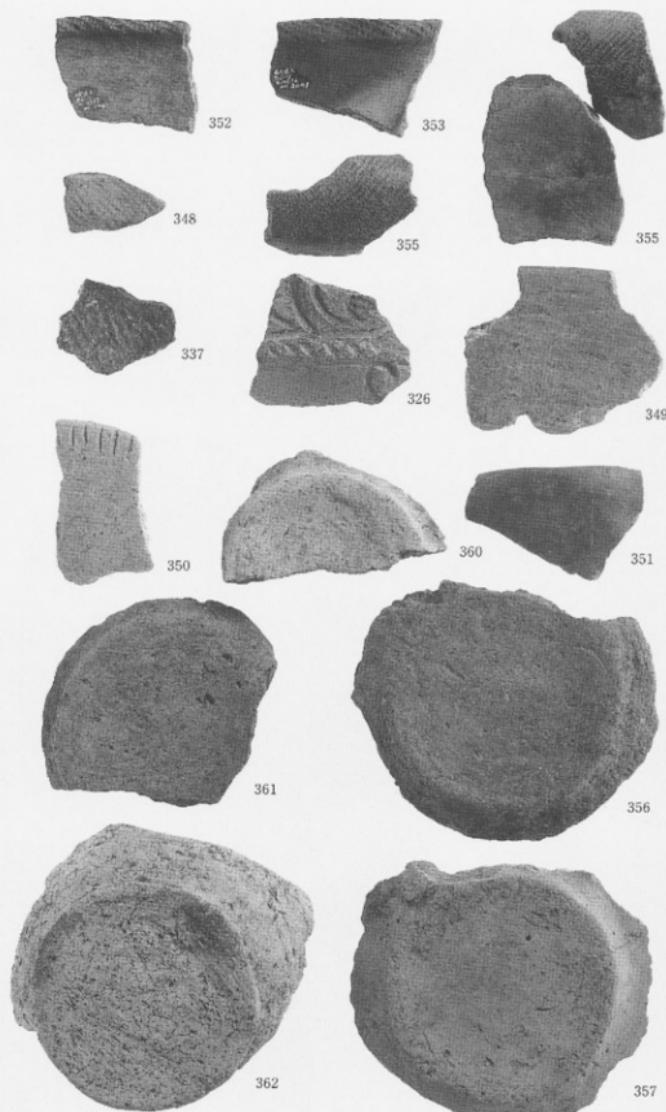
河道 S D 1 Ⅲ層出土土器 (9)



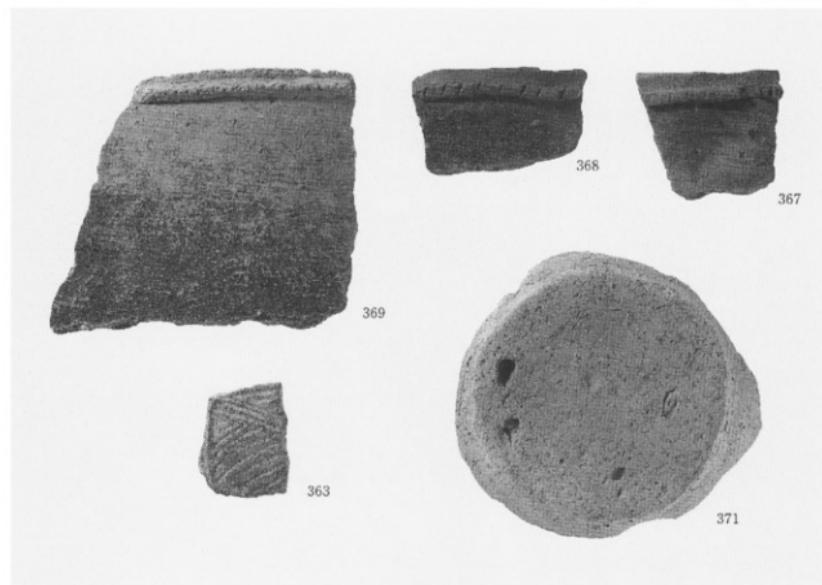
河遺 S D 1 IV・V 層出土土器



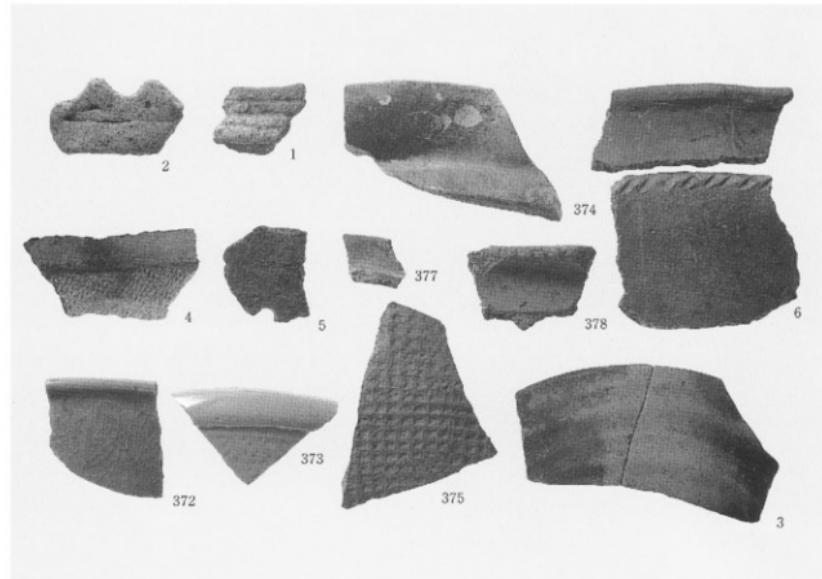
河道 S D 1 VI層出土土器 (1)



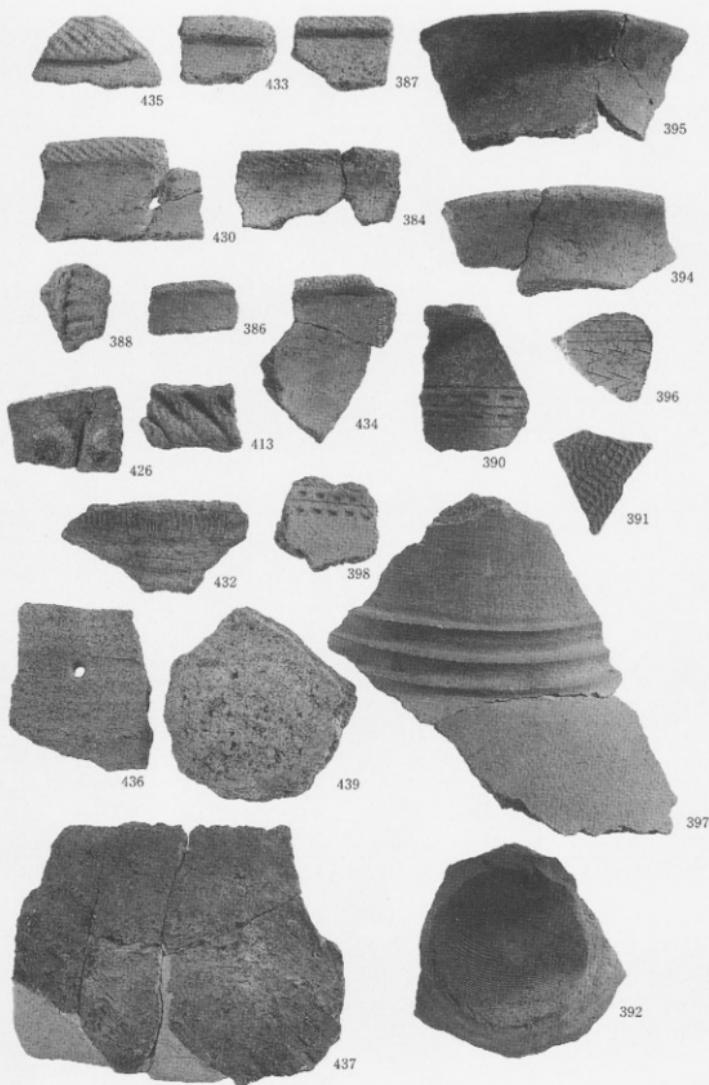
河道 S D 1 VI 层出土土器 (2)



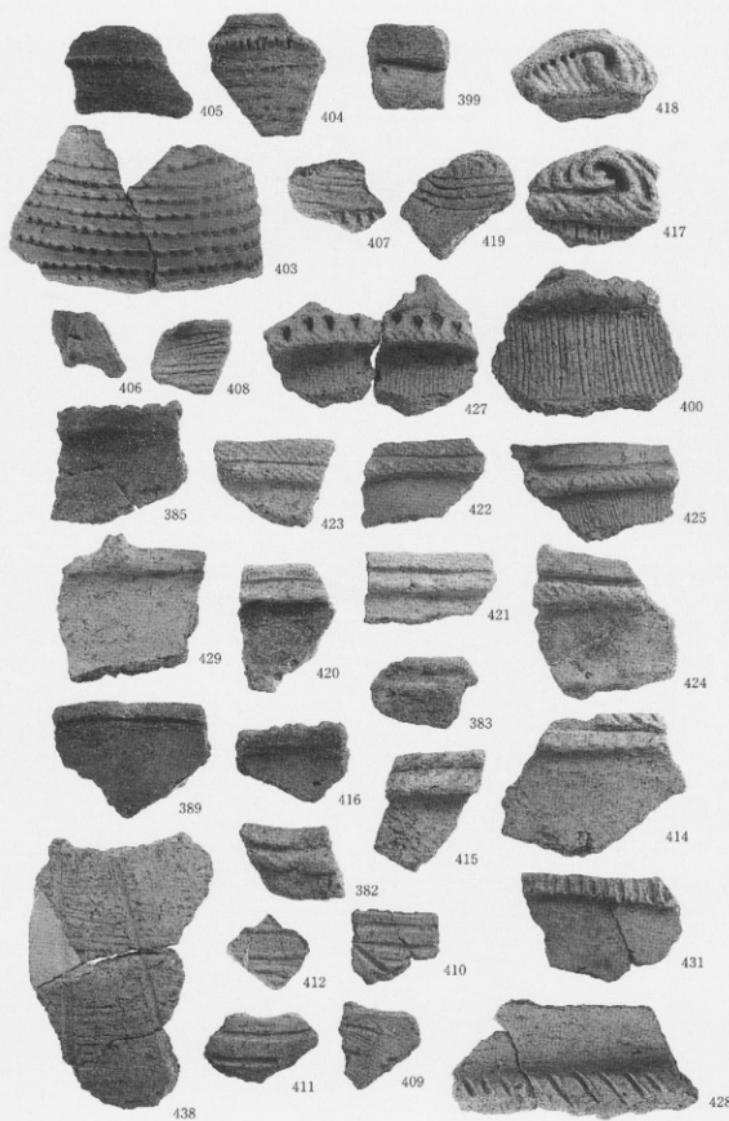
1. 河道 S D 1 VII - IX - XI - XIII 層出土土器



2. S D - SK 出土土器



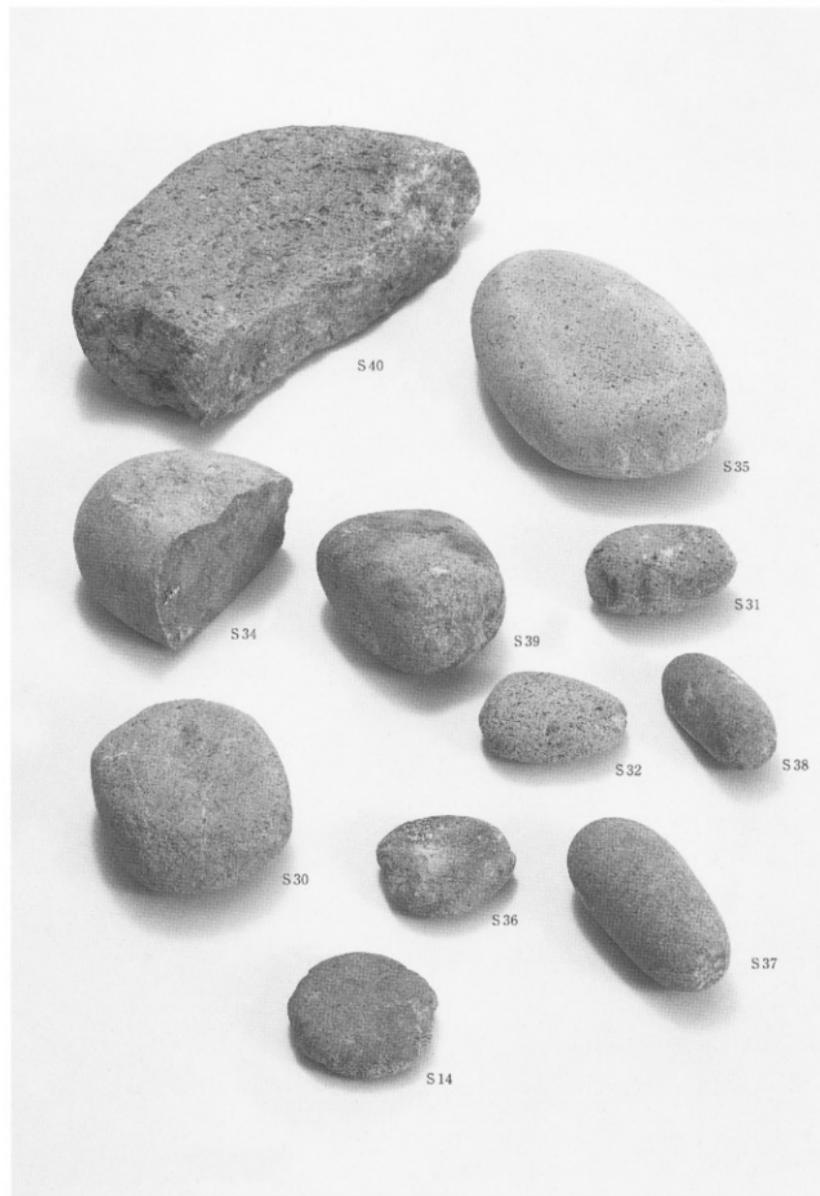
黑色土包含層出土土器（1）



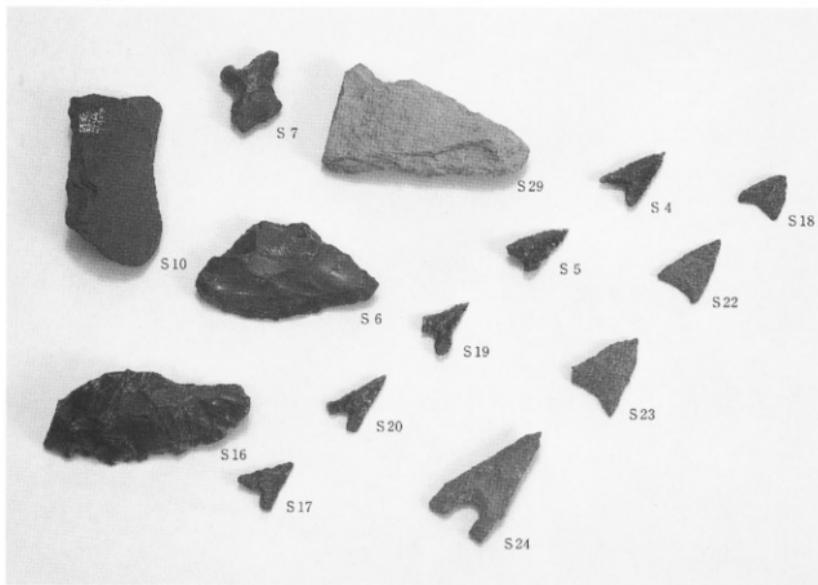
黑色土包含层出土土器（2）



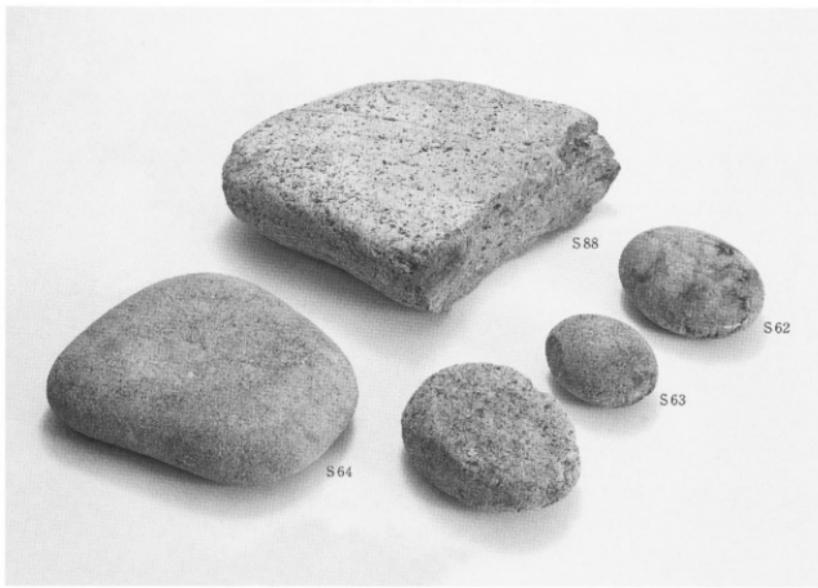
河道 S D 1 I · II 层出土石器 (1)



河道 S D 1 I + II 层出土石器 (2)



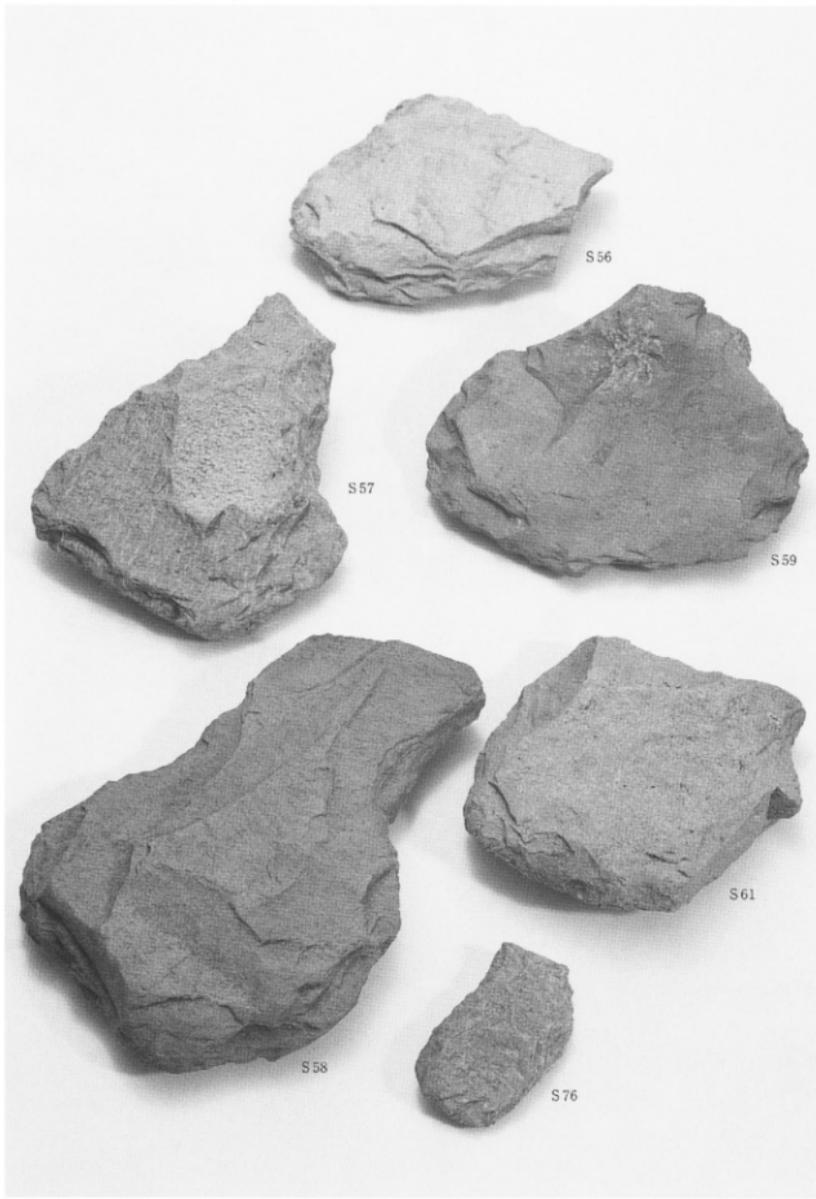
1. 河道 S D 1 I · II 层出土石器 (3)



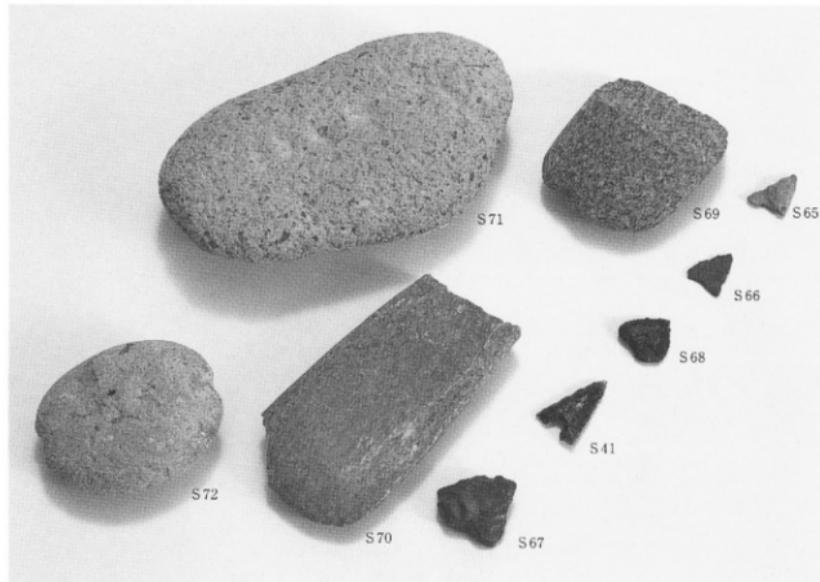
2. 河道 S D 1 III 层出土石器 (1)



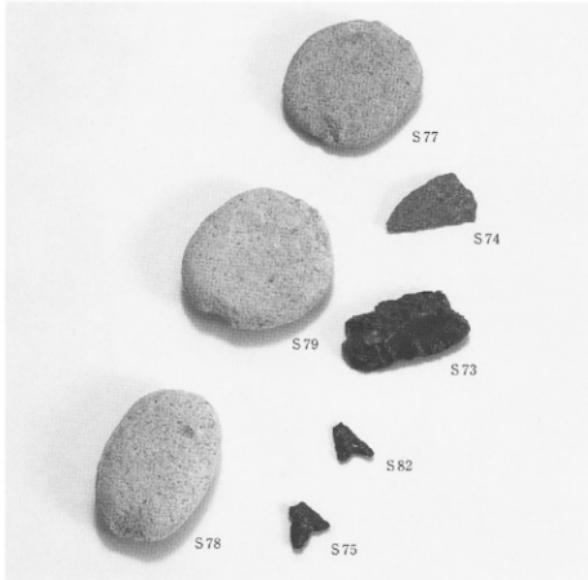
河道SD1 III層出土石器(2)



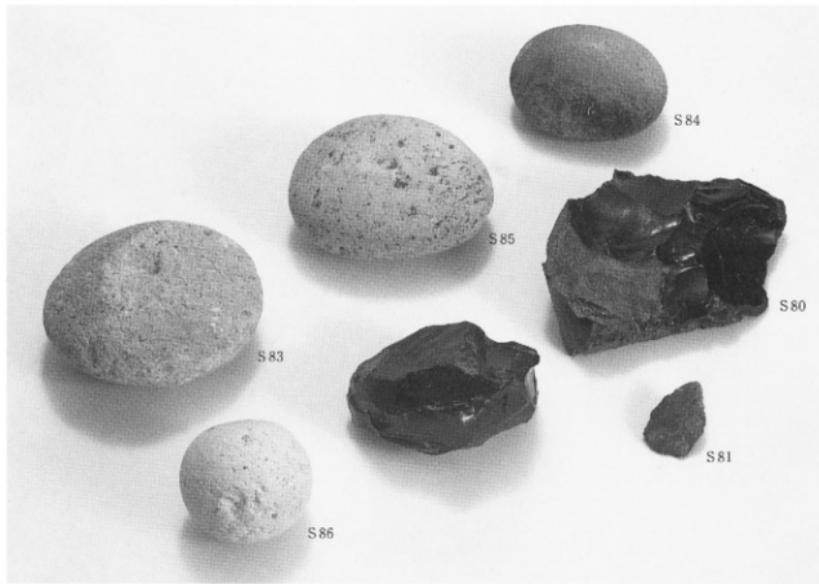
河道 S D 1 Ⅲ層出土石器 (3)



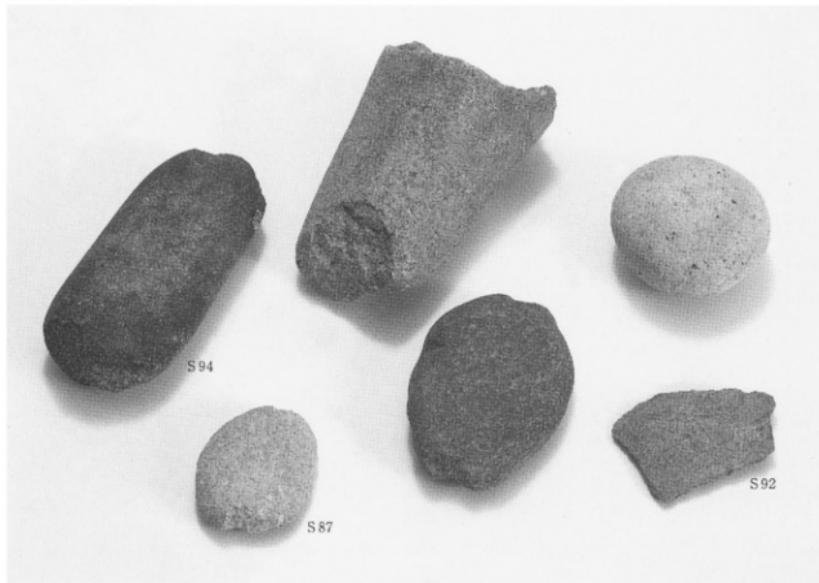
1. 河道SD1 IV層出土石器



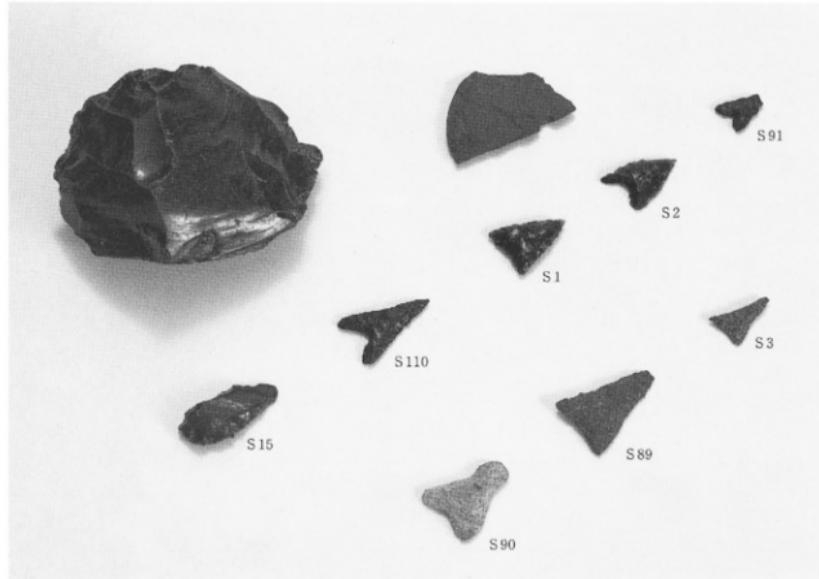
2. 河道SD1 V層出土石器



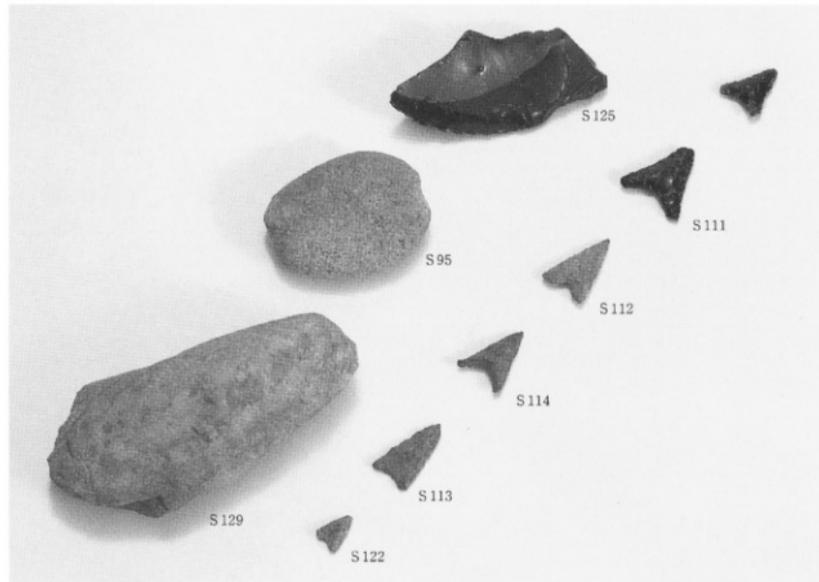
1. 河道SD1 VI層出土石器



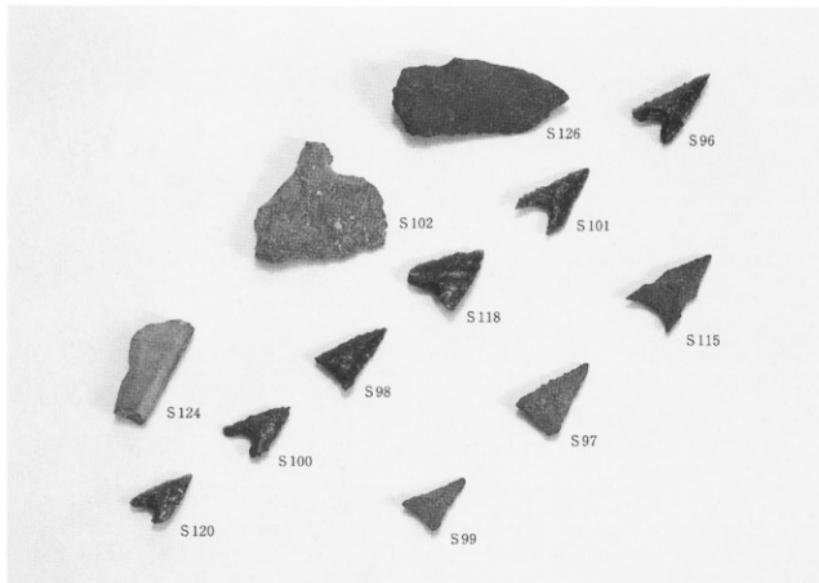
2. 河道SD1 VII~XII層・埋土中出土石器



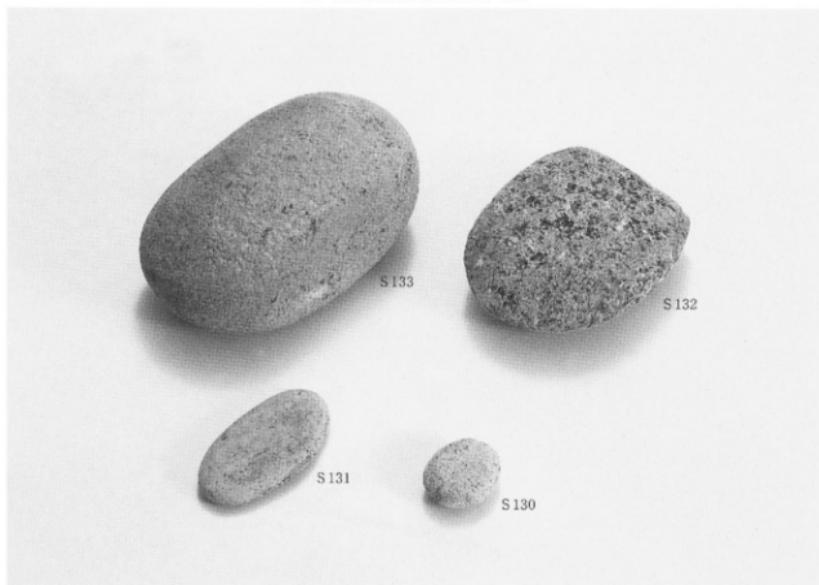
1. 河道SD1Ⅸ~XIII層出土石器



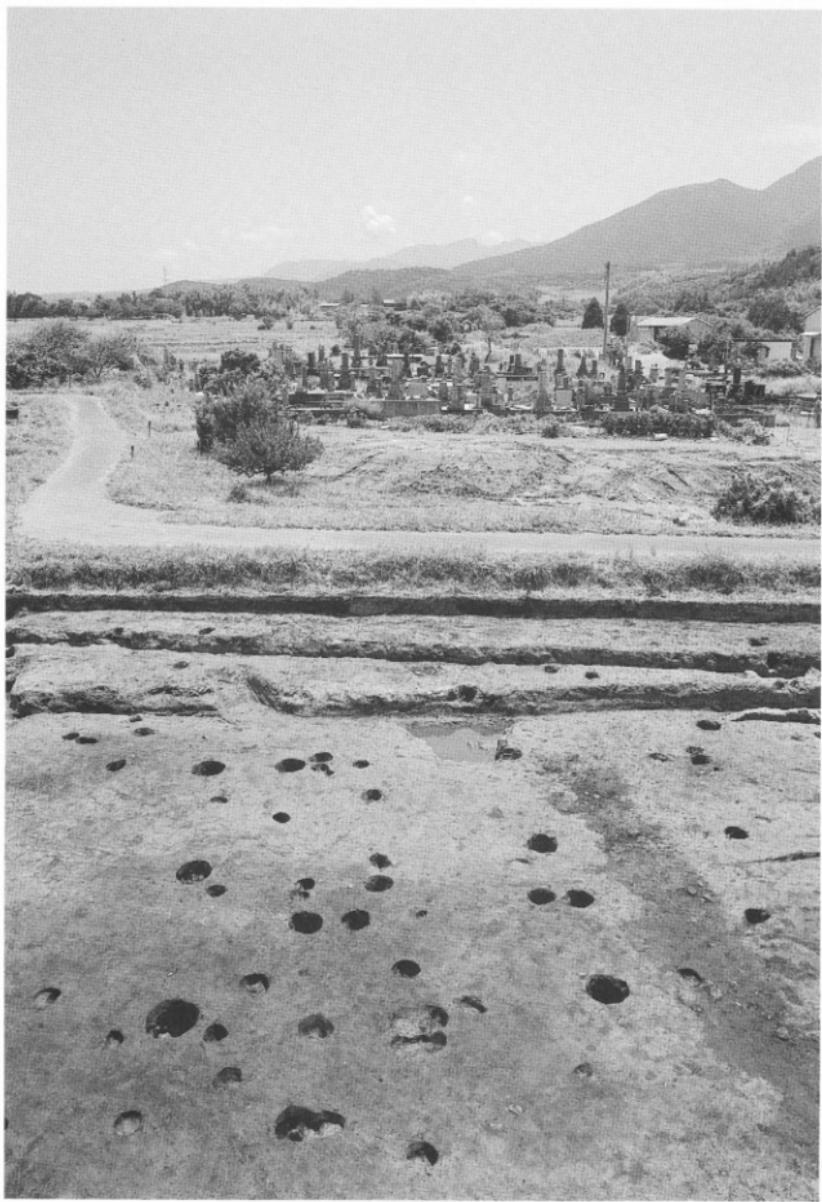
2. 河道SD2·SD4出土石器



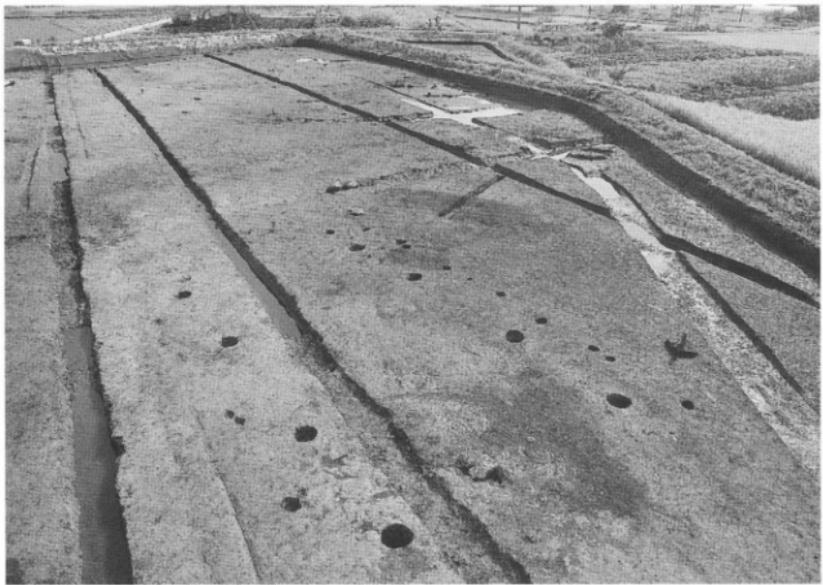
1. 1区調査区内出土石器（1）



2. 1区調査区内出土石器（2）



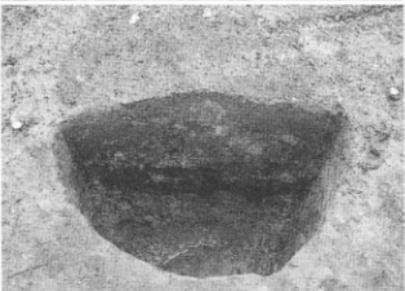
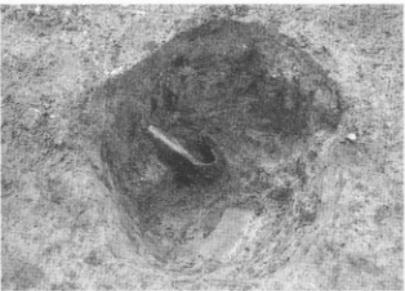
1. SBI (北西から)



1. SB 2 (東から)



(上) 2. SB 2 P 1 土層断面 (西から)
(下) 3. SB 2 P 3 土層断面 (西から)



(上) 4. SB 2 P 5 (南西から)
(下) 5. SB 2 P 6 土層断面 (北西から)



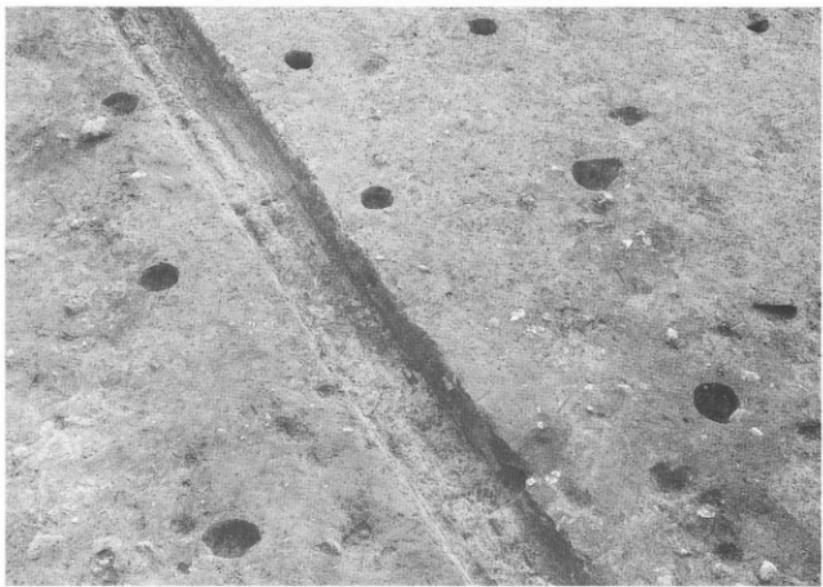
1. S B 3 (東から)



2. S B 6 (北西から)



1. SB 6、SB 7、SD 13周辺完掘状況（北西から）



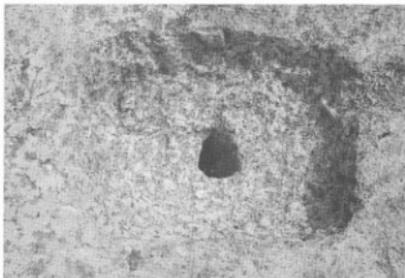
2. SB 7（北東から）



1. SB5、SB8 (南東から)



2. SB5 P2 土層断面 (南東から)



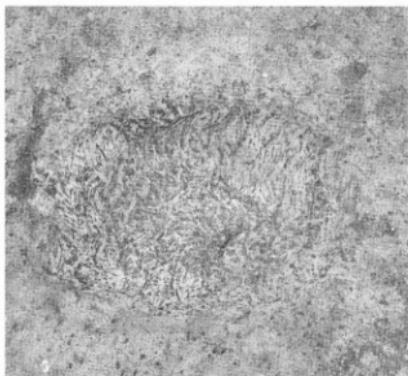
4. SK18 (北東から)



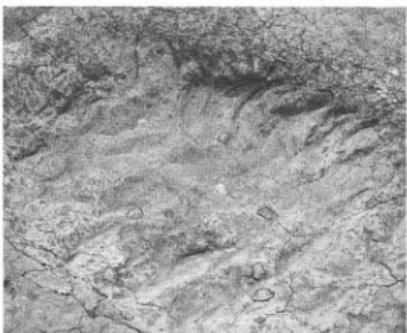
3. P188 遺物出土状況 (北東から)



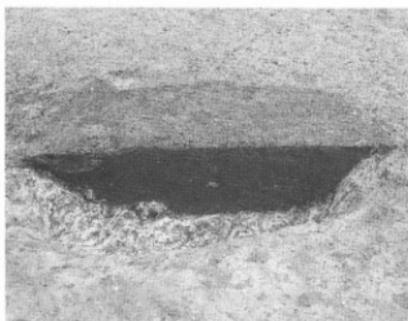
5. SK18 土層断面 (西から)



1. SK 20 (北東から)



4. SK 20 底面掻削痕 (北から)



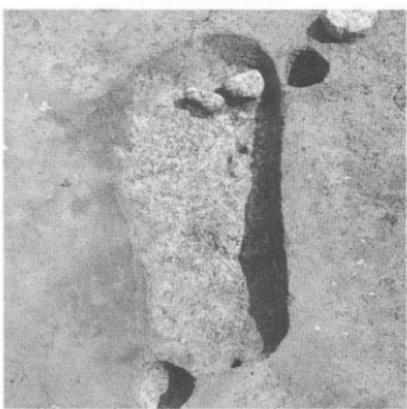
2. SK 20 土層断面 (南西から)



5. SK 21 (東から)



3. SK 20 遺物出土状況 (東から)



6. SK 22 (北西から)



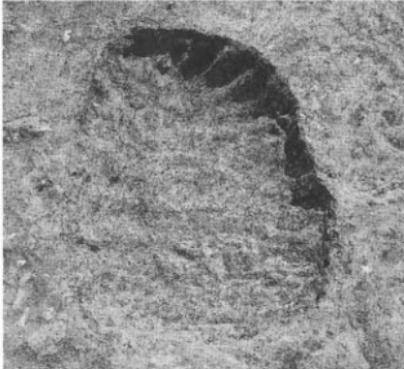
1. SK 23 (南東から)



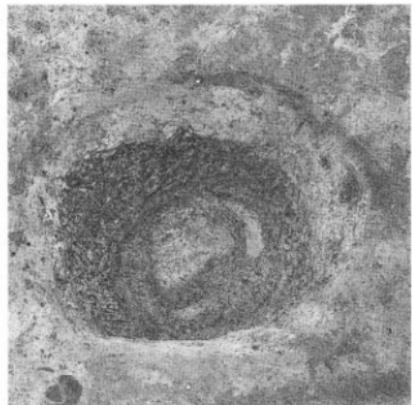
4. SK 24 (東から)



2. SK 25 土層断面 (南西から)



5. SK 26 (北東から)



3. SK 25 (北から)



6. SK 26 遺物出土状況 (北から)



1. SK 26 土層断面（北東から）



2. 河道SD 9 土層断面（西から）



3. 河道SD 9（北西から）



4. 河道SD 9、SD 10（南から）



1. 河道SD 9 遺物出土状況（南から）



3. 河道SD 10 遺物出土状況（2）（南東から）



2. 河道SD 10 遺物出土状況（1）（北東から）



4. 河道SD 10 土層断面（北から）



5. 河道SD 12（西から）



6. 河道SD 12 遺物出土状況（東から）



1. SD 13 (北東から)



3. SD 13 遺物出土状況 (東から)



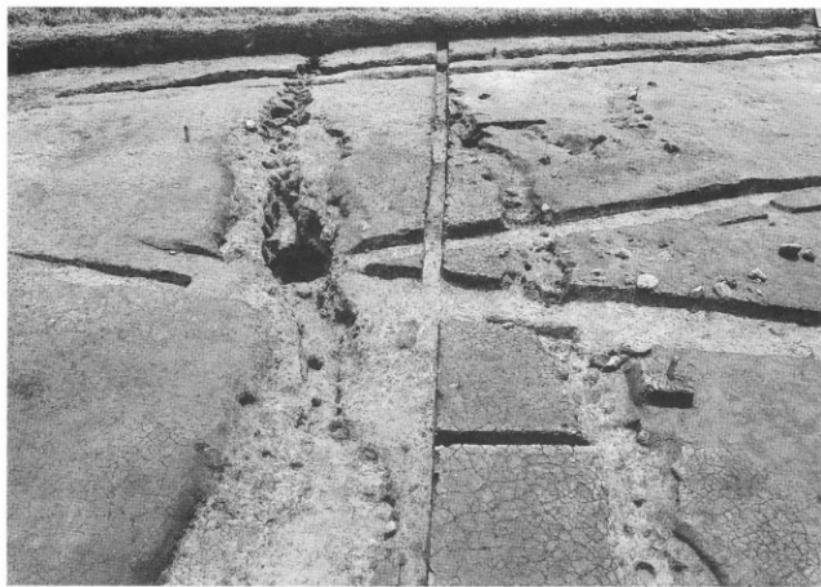
2. SD 13 底面掘削痕 (西から)



4. SD 13 土層断面 (西から)



5. 河道SD 20 土層断面 (東から)



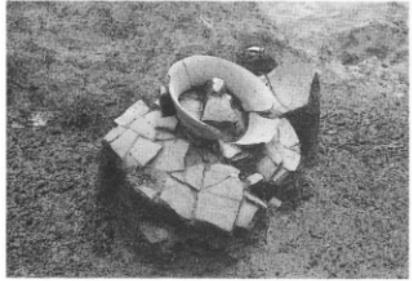
1. 河道SD 19、SD 20（北西から）



2. 河道SD 20 遺物出土状況（南東から）



4. 河道SD 20 遺物480出土状況（南から）



3. 河道SD 20 遺物481出土状況（東から）



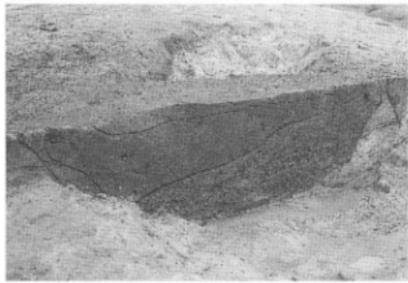
5. 河道SD 19 土層断面（南西から）



1. 河道SD 20 木製品(又鉢W 2)出土状況(北から)



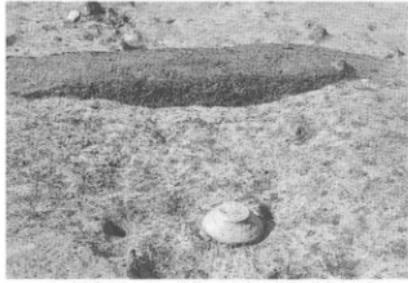
2. 河道SD 21 (北から)



3. 河道SD 21 土層断面(北から)



5. 河道SD 17 (北西から)



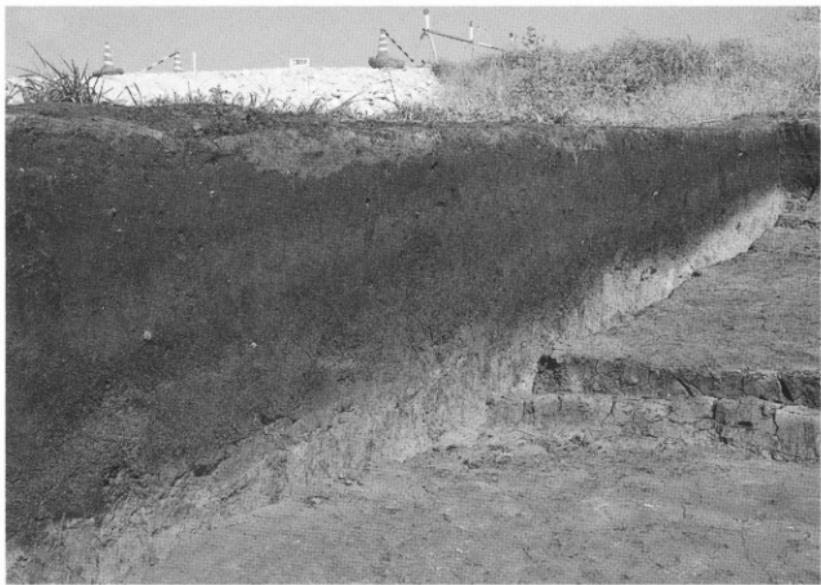
4. 河道SD 15 遺物463出土状況(南から)



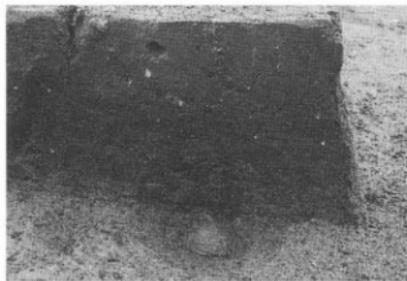
1. 黒色土包含層1検出状況（東から）



2. 黒色土包含層1土層断面（北から）



1. 黒色土包含層 2 土層断面（南から）



2. SB 5 P 2 土層断面（北東から）



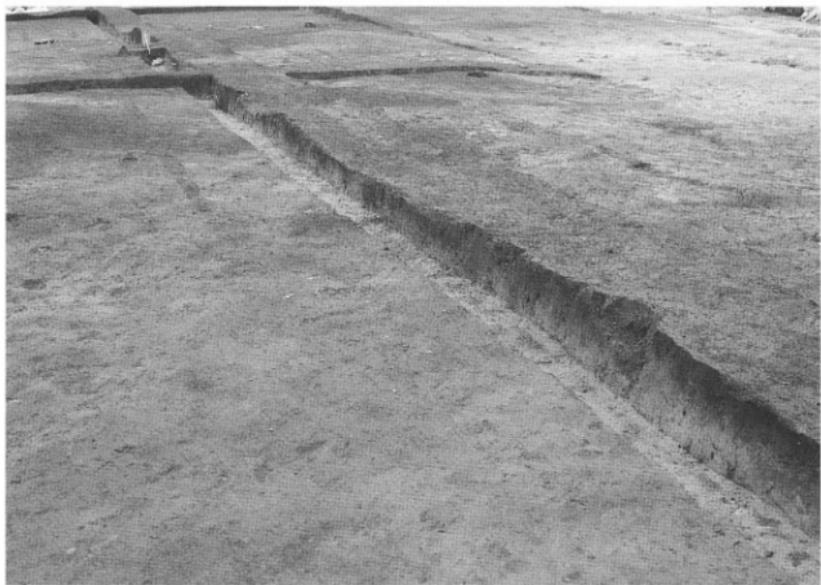
3. 黒色土包含層 2 (2層) 遺物 509 出土状況 (東から) 4. 黒色土包含層 2 (2-1層) 遺物出土状況 (北から)



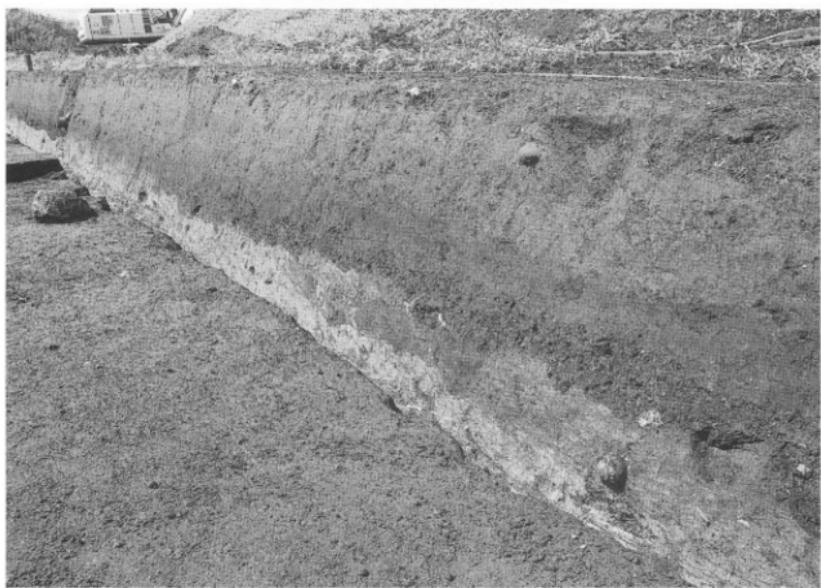
1. 黒色土包含層2（2・3層）遺物出土状況（東から）



2. 黒色土包含層2ペルト土層断面（北から）



1. 黒褐色土包含層1 土層断面（南西から）



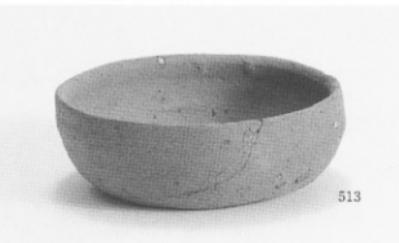
2. 黒褐色土包含層2 土層断面（東から）



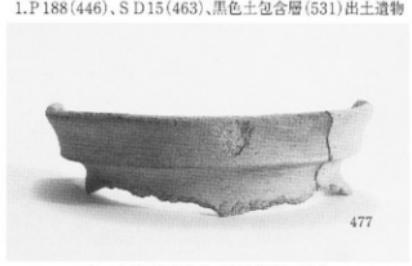
1. P 188(446)、S D 15(463)、黑色土包含層(531)出土遺物



4. 河道 S D 20 出土遺物 (3)



5. 黑色土包含層 2 出土遺物



2. 河道 S D 20 出土遺物 (1)



3. 河道 S D 20 出土遺物 (2)



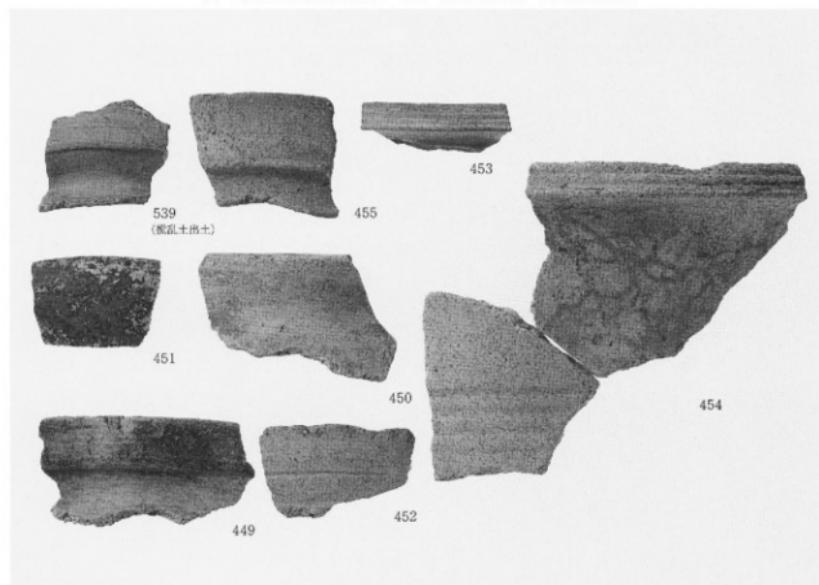
6. 黑色土包含層 2 (2層) 出土遺物



S B 2 出土柱根材



1. 河道 S D 20 出土遺物 W 2 (又鉢)、W 3 (杭状木製品)



2. 河道 S D 9 (449~451)、河道 S D 10 (452~455) 出土遺物



459



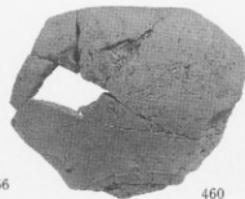
458



457



456



460



461



462



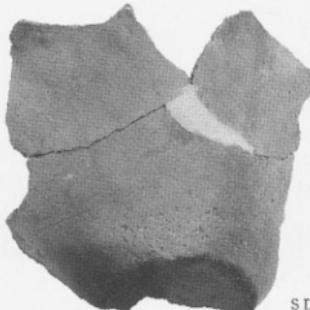
SD 11



SD 20

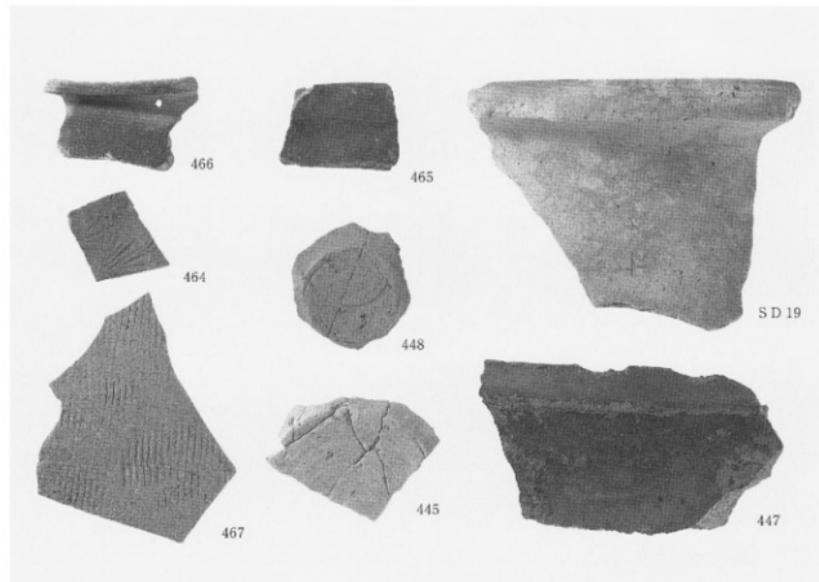


486

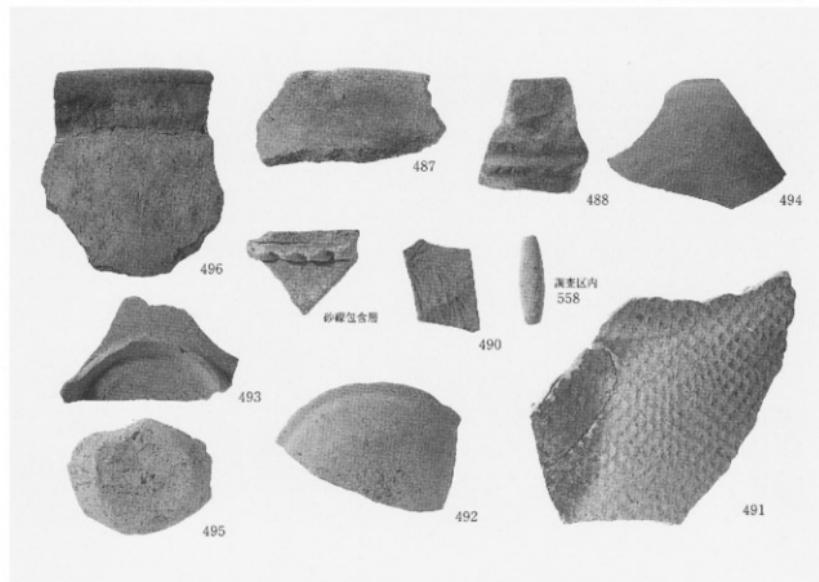


SD 20

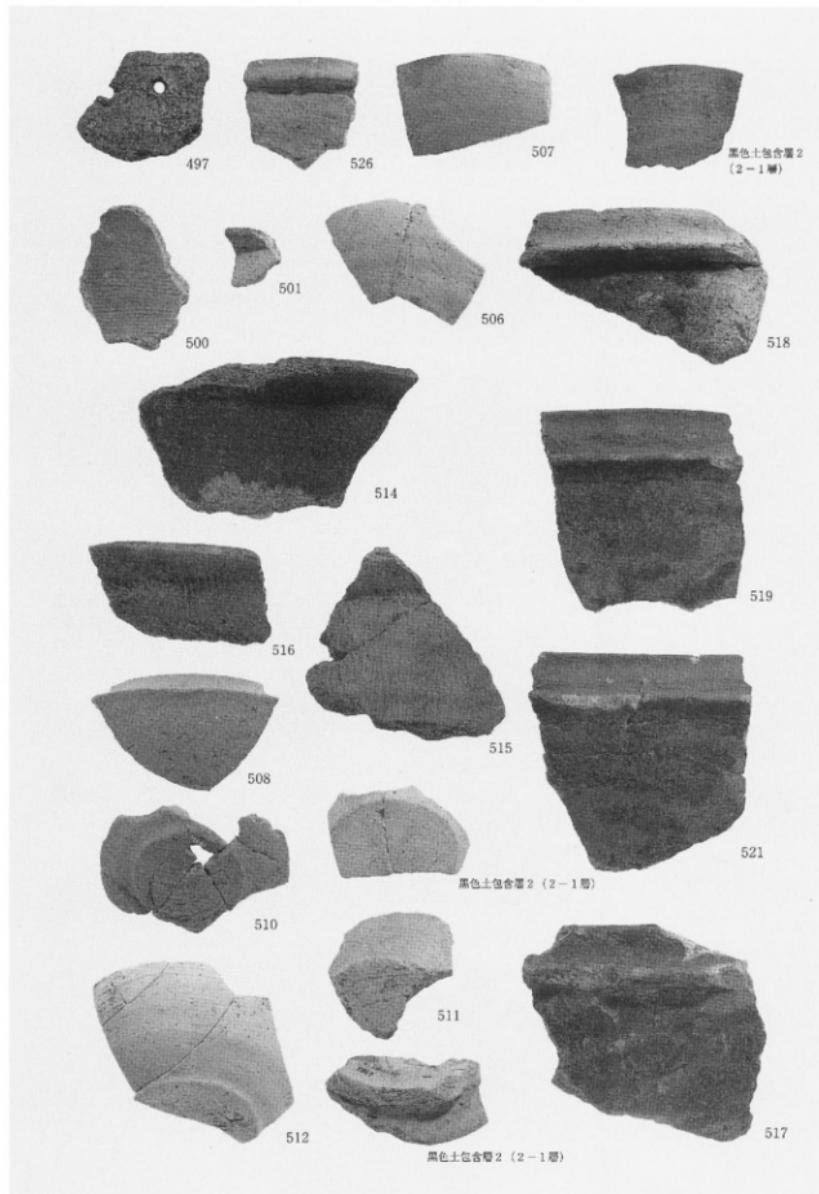
SD 11、SD 12（456～461）、SD 13（462）、SD 20（486）出土遺物



1. S B5(445)、S K20(447)、S K23(448)、S D15(464)、S D19(466、467)、S D21(465)出土遺物



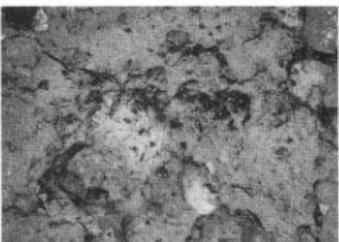
2. 黒褐色土包含層 (487、488、490~496)、砂礫包含層出土遺物



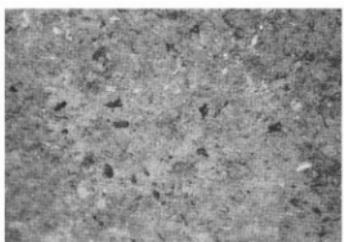
黑色土包含層 (2層) 出土遺物



(写真1) 番号2. 粗文時代晚期



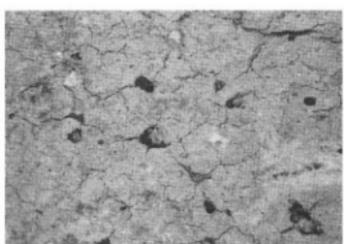
(写真2) 番号7. 弥生時代前期



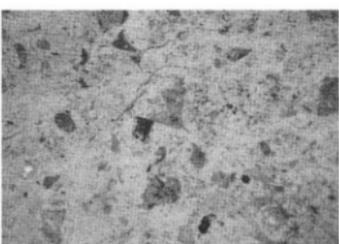
(写真3) 番号14. 弥生時代前期



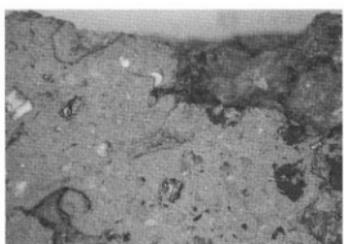
(写真4) 番号20. 弥生時代中期



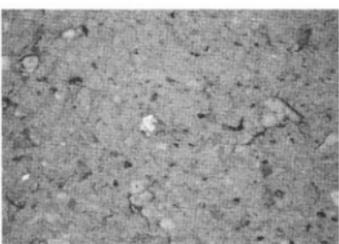
(写真5) 番号26. 弥生時代中期



(写真6) 番号27. 弥生時代後期

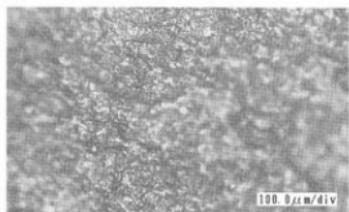


(写真7) 番号28. 古墳時代中期

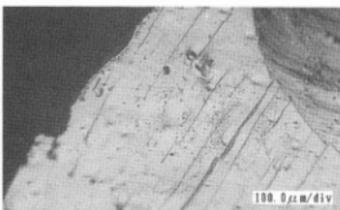


(写真8) 番号31. 粘土 (焼成)

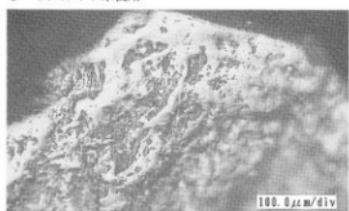
実体顕微鏡による胎土観察 (11倍)



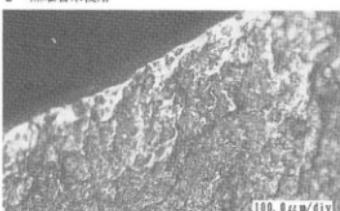
1 サスカイト未使用



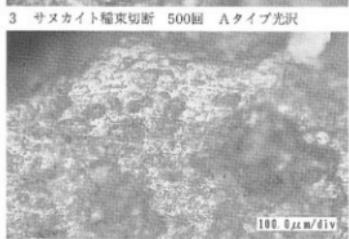
2 黒曜石未使用



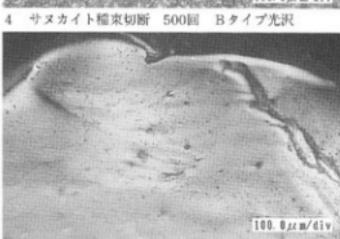
3 サスカイト粗束切断 500回 Aタイプ光沢



4 サスカイト粗束切断 500回 Bタイプ光沢



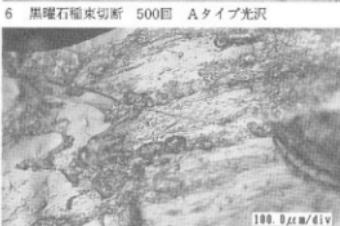
5 頁岩粗束切断 250回 Bタイプ光沢



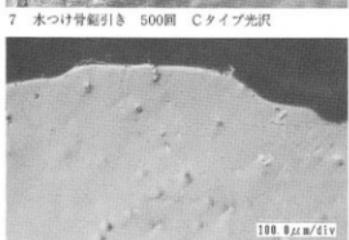
6 黒曜石粗束切断 500回 Aタイプ光沢



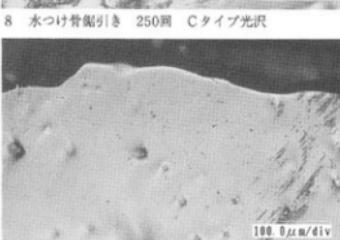
7 水つけ骨粗引き 500回 Cタイプ光沢



8 水つけ骨粗引き 250回 Cタイプ光沢

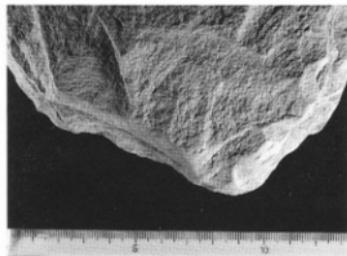
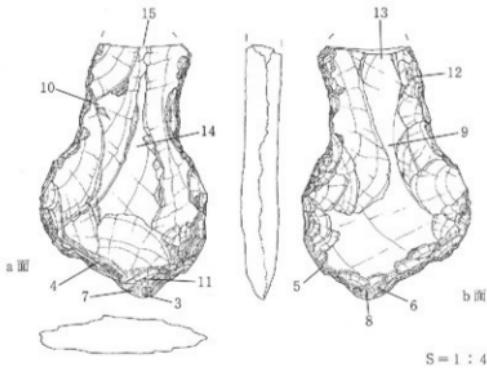


9 水つけ骨搔きとり 500回 D1タイプ光沢

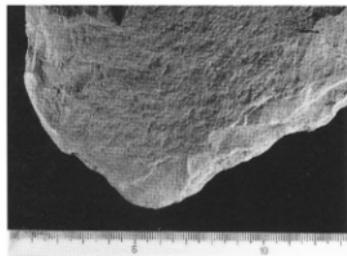


10 水つけ骨搔きとり 500回 D1タイプ光沢

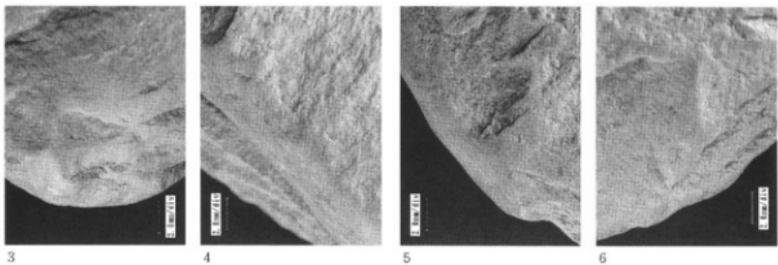
図1 主な光沢タイプ



1 刃部 a面

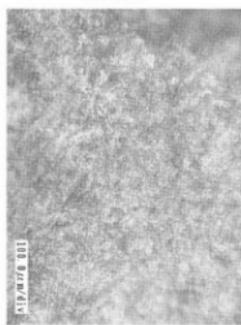


2 刃部 b面

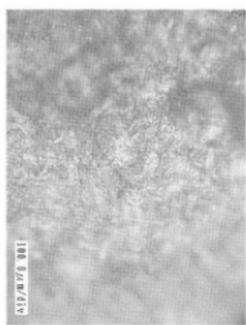


刃部摩耗部の拡大（写真3-6）

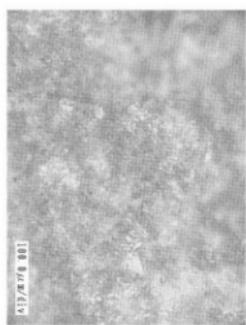
図2 打製石鋸（S 58）の使用痕



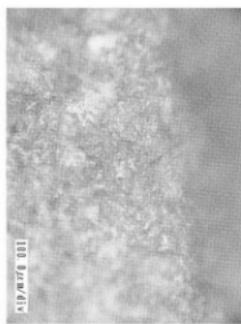
7 不明光沢
刃部摩耗部分



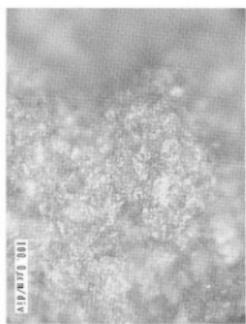
8 不明光沢
刃部摩耗部分



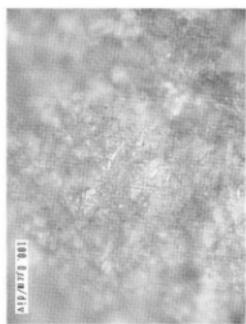
9 石器の表面



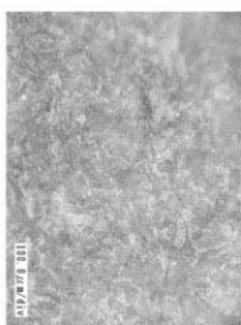
10 柄側辺部分にみられる摩耗



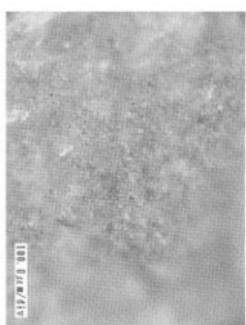
11 不明光沢と縦状痕
刃部摩耗部分



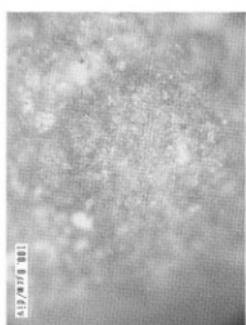
12 柄側辺部分にみられる摩耗



13 柄部分の表面
肉眼でも光沢が確認できる部分



14 石器表面



15 柄部分の表面
石器長軸に平行する縦状痕

図3 打製石錘（S 58）の使用痕

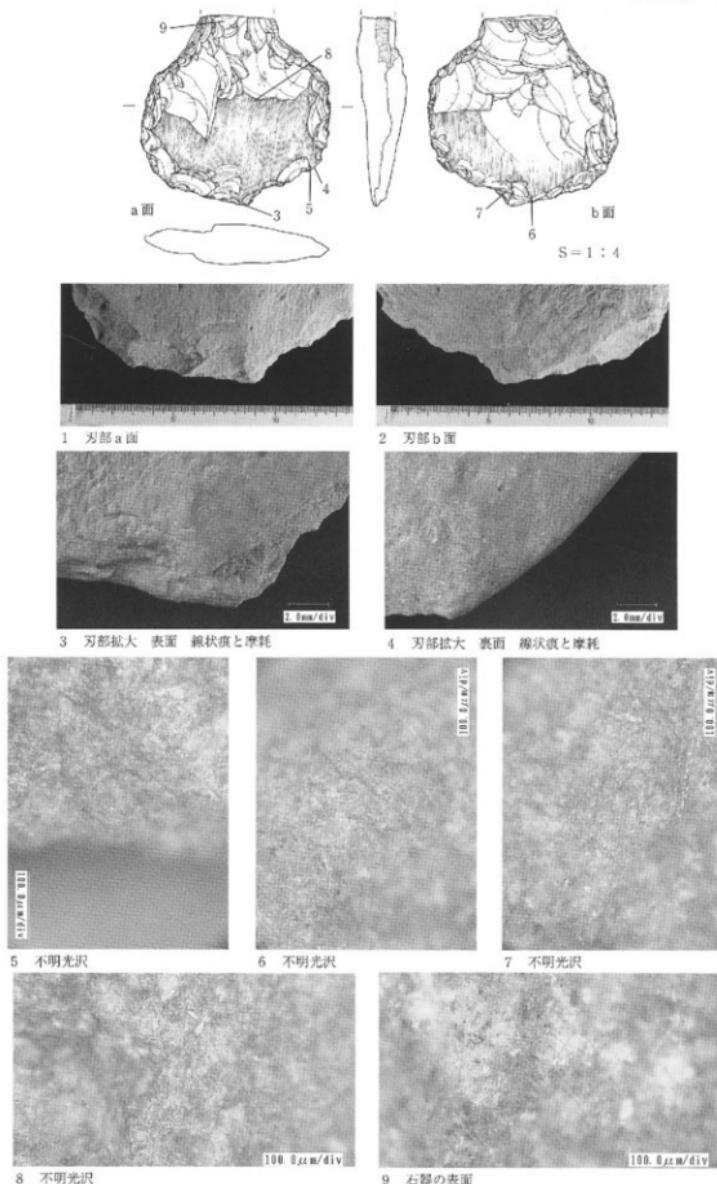


図4 打製石鉈（S 59）の使用痕

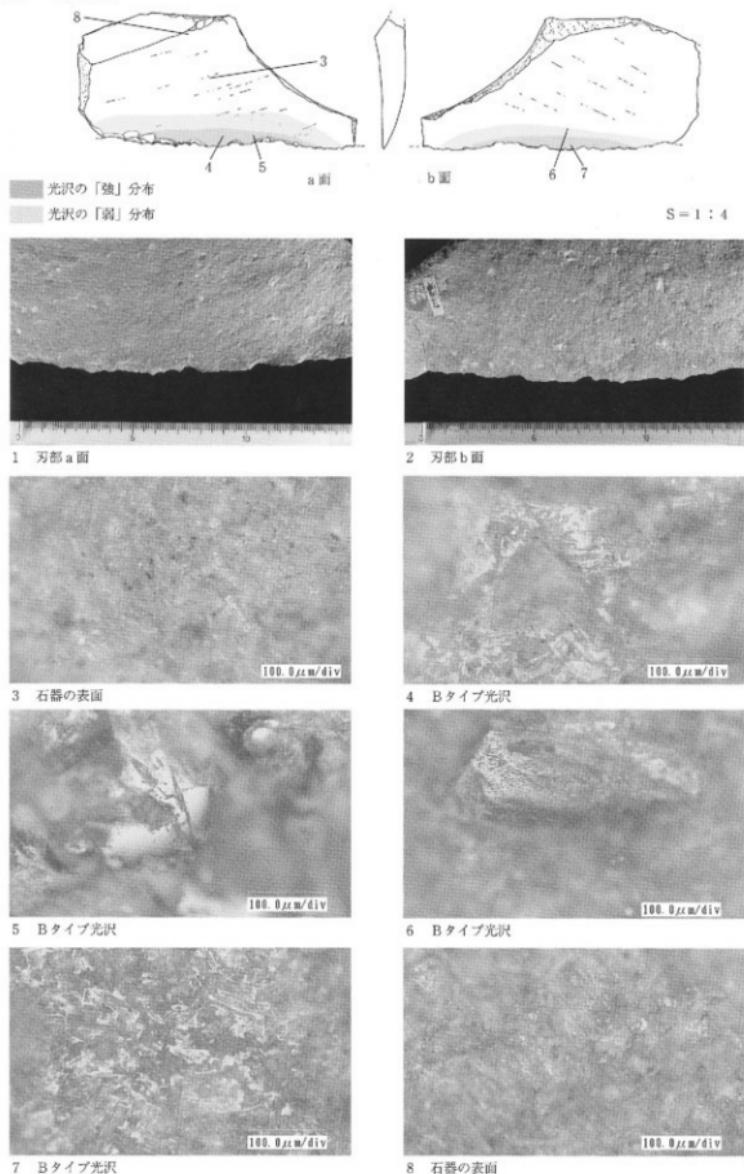
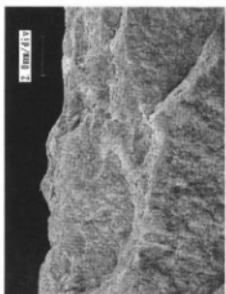
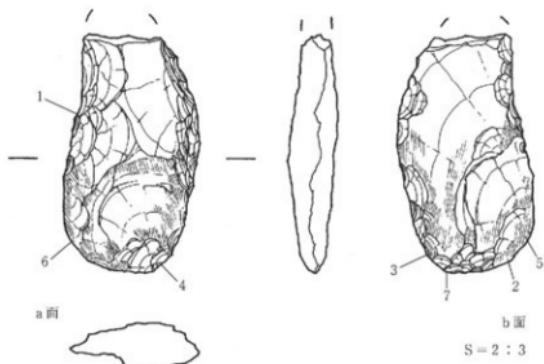


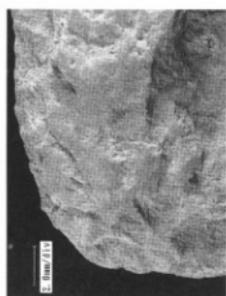
図5 板状石器（S 52）の使用痕



1 頸縁の加工



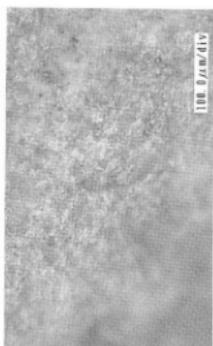
2 刃部の摩耗



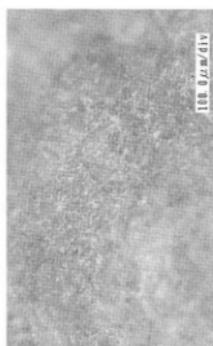
3 刃部の摩耗



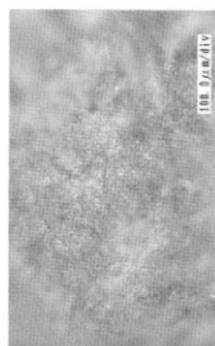
4 刃部の摩耗と線状痕



5 不明光沢と摩耗



6 不明光沢と摩耗



7 不明光沢と摩耗

図6 打製石斧（S 76）の使用痕

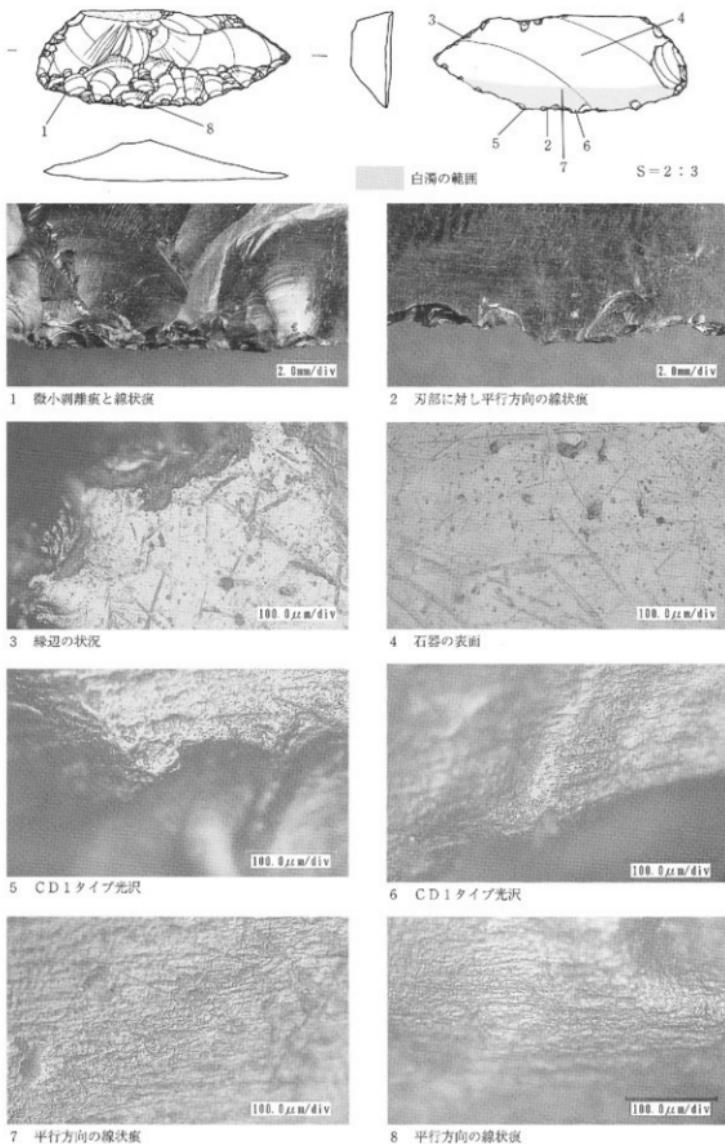


図7 スクレイパー（黒曜石 S 108）の使用痕

報告書抄録

ふりがな	むきほうだいじんいせき							
書名	妻木法大神遺跡							
副書名	一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	81							
編著者名	西川徹 君嶋俊行 岡野雅則 森本倫弘 小林桃子							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県岩美郡国府町宮下1260 Tel.0857-27-6711							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
妻木法大神遺跡	西伯郡大山町大字妻木 字澤田1244~1246、 字中根垣1309~1311、 字法大神1322~1327	市町村 313866	遺跡番号 1-327	35° 28' 07"	133° 27' 18"	20010402~ 20011206 20020402~ 20020930	13,606m ²	一般国道9号 (名和淀江道路) の改築
所 収 遺 跡 名	種 別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
妻木法大神遺跡	自然河道	縄文時代後期～ 鎌倉時代	河道	18	縄文土器、弥生土器、 石器、須恵器、土師器	縄文後期、弥生前期 の土器群、石器群		
	集 落	弥生時代	堅穴住居	1	—	—		
		縄文時代	土坑	2	縄文土器			
		鎌倉～室町時代 (12～14c)	掘立柱建物 土坑 溝	8 4 2	土師器、須恵器、瓦質 土器			
		時期不明	土坑	21	—			
	包含層	縄文時代後期～ 室町時代	—	—	縄文土器、弥生土器 土師器、瓦質土器	—		
		平安時代	—	—	土師器	—		

鳥取県教育文化財団調査報告書 81

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

鳥取県西伯郡大山町

妻木法大神遺跡

発行 2000年3月31日

編集 財団法人鳥取県教育文化財団

鳥取県埋蔵文化財センター

〒680-0151 鳥取県岩美郡国府町宮下1260

電話 (0857) 27-6711

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印刷 株式会社 鳥取平版社